Circus Notte

夜のサーカス

-1-

Author : Yu Yaotome
Copyright@ 2014 Yu Yaotome

目次

夜のサーカスと紅い薔薇
夜のサーカスと金の星
夜のサーカスと孔雀色のソファ
夜のサーカスと南瓜色の甘い宵
夜のサーカスとチョコレート色の夢
夜のサーカスと無花果のジャム
夜のサーカスとノンナのトマトスープ
夜のサーカスとわすれな草色のジャージ
夜のサーカスと西日色のロウソク
夜のサーカスと鬱金色の夕暮れ
夜のサーカスと極彩色の庭

夜のサーカスと紅い薔薇

　薄暗い灰色の洞窟のごときバルにはたくさんの客はいなかった。奥の席に少年が一人、水色のシャツに色褪せたジーンズ姿、冬の終わりの柏の葉の色をした髪で暗い茶色の瞳、目立つ所の何もない、壁に溶け込んだような様相で座っていた。

　レジに近いテーブルには、村の常連達がいつものように集い、ビールを傾けて噂を交換していた。

「オオザの山火事の原因はわかったのか？」

「ああ、誰だったと思う？」

「ジプシーの小僧か？」

「くっく……、とんでもない、オオザの村長だったのさ」

「嘘だろう？」

「本当だって、消防団のルカが教えてくれたんだ。煙草の不始末だとさ。大変な罰金になるだろうな」

「あらら」

「パン屋のジャンがそのルカに女房を寝取られた話はどうなったんだっけ」

「あれはジャンが間抜けだったんだ。チルクス・ノッテにうつつを抜かして何晩も留守にしていたんだから」

「あはは。で、ノッテにはお前も行ってきたのか？」

「ああ、久しぶりにこの町に来たサーカスだからな」

「どうだった？」

「花形は同じだったよ」

「ブランコ乗りのジュリアか」

「ああ、相変わらずきれいだったな」

「お相手のトマは落っこちて死んだって噂だが」

「ああ、一人ブランコだったな。でも新たに褐色のマッチョな逆立ち男がいた。それから面白いピエロも。きっと今はあの二人でジュリアを取り合っているに違いない」

「ピエロに勝ち目はありそうなのか？」

「ないね。ひょろひょろして泣きそうなフニャフニャ野郎だ。そんなに若くもなさそうだ。きっと逆立ち男のブルーノにジュリアに近づくなと脅されているさ」

　男たちが勝手な噂をしている間、学校に入る前くらいの幼い娘に食事をさせていたバルの女将のマリはため息をついた。

「サーカスかあ。ずっと行ってないわ。明日は休みだからステラを連れて行こうかしら」

「行って来いよ。あのピエロはいいぞ。おかしいし、巨大なボールを上手く使うぜ。ステラは喜ぶだろうよ」

　母親が男たちの話題に加わって一人になったステラは椅子から降りてそっとバルの中を歩いた。コーヒーを飲んでいる少年に近づくと話しかけた。

「サーカスを観に行った？」

「行かないよ」

「ふーん。あたしは明日行くのよ」

「そうか。楽しんでおいで」

「あなた、私と同じで一人なのね。なんていう名前？」

「ヨナタン」
「そう、あたしはステラよ」
「はじめまして、ステラ」
そういうとヨナタンは目の前の花瓶に差してあった少し埃をかぶった白い造花を抜いて少女に差し出した。
少女は金色の瞳を輝かせて言った。
「ありがとう。白い花なのね」
「そうだよ。どうして？」
「この地方ではね」
マリがステラを連れに来て言った。もう子供は寝る時間なのだ。
「白い花を出会いの時に渡した男が次に会った時に赤い花を持って迎えにくるっておとぎ話があるのよ」
「次に会ったら赤い花をちょうだいね」
幼いステラの言葉にヨナタンは笑って手を振って応えた。

母と娘がいなくなると、男たちはまた噂話に戻った。忘れ去られた少年は代金をテーブルの上に置くとひっそりと立ち去った。
彼は町の外れの幾つものキャラバンカーが停まっている広場へ行った。大きなけばけばしいテントの裏手だ。物悲しい色とりどりの電球が輝き、紙吹雪がはらはらと土の上を舞っている。
小さなキャラバンカーの前に来ると隣から古びた赤い、スパンコールでキラキラした衣装を着た女が出てきた。
「あら、ヨナタン。団長を見なかった？」
次期団長候補だったトマが死んでから、ジュリアは団長に色目を使うのに必死だが、十年前と違ってもはやその神通力はなくなっていた。
ヨナタンはジュリアのシワの目立ち出した目尻を見ながら答えた。
「いいえ。見ませんでした」
本当は団長はブルーノのキャラバンカーに入って行ったのだが、本番前に花形スターをヒステリー状態にすることもないだろうと思ったのだ。

ヨナタンは自分のキャラバンカーに入って鍵を掛けた。中は狭いが良く整理されていて、ドアの正面に大きな鏡があった。
彼は上半身裸になると鏡の前の小さなスツールに腰掛けて化粧を始めた。特徴のない優しい顔が白いドウランで埋まっていく。
ここには僕が誰かを問う者はいない。ブランコ乗りの女に夢中の壮年イタリア人ピエロだと誰もが思っている。僕の数奇な十六年の人生を知る者はいない。
左の目の周りに赤い大きな星が花のように開く。口の周りは大きく縁取られてニイっと笑う。右目の下には大きな線を引く。泣いているように見える。

土曜日のショウはオールスターだ。ブルーノが馬の上で逆立ちをし、片手で全身を支える。ゆっくりと両足を１８０度開き身体を捩じらせてもう片方の手に重心を移動すると、大きな拍手が起こった。
空中を華麗にブランコが揺れる。紅い薔薇を捧げ持ち大きなボールに追われてピエロが舞台に上がってきた。
退場しようとしていたブルーノが力強く腕を振り回し、ピエロを追い回す。逃げ回りながら、ピエロは何度もボールにつまづく。滑稽で無様な様子に観客は大喜びだ。

その間に高く空中に持ち上げられたブランコに乗ったジュリアは可憐なターンを始める。

ピエロはジュリアが落ちたら素早くネットを拡げるためにここにいる。人々がジュリアに夢中になっている間、注意深く上を観察している。今日はジュリアの調子がいい。すべての技が成功し、割れるような拍手を受けて満面の笑顔で彼女は去った。

ピエロはブランコ乗りの姫を無様な動きで追いながら舞台を一周する。人々は大笑いで惨めな失恋者に拍手を送る。こんなおかしなピエロを見た事はない。

舞台に一番近い正面の席に、母親に連れられた、学校に入る前くらいの年齢の少女が座って、じっとピエロを眺めていた。

どの観客も、彼女の母親ですら笑っているのに、彼女だけは氣の毒そうに彼が笑われているのを見ていた。

これは僕の仕事なんだよ、君が傷つくことはないのに。ピエロは少女に近づいてその前で止まった。スポットライトが二人を照らした。観客は笑うのをやめて二人に注目した。

少女が泣きそうだったので、ピエロはたまらなくなって紅い薔薇を差し出した。

「ヨナタン？」

ピエロがうなづくとステラは笑った。

＊＊＊

「そういう事が、十年前にあったのよ」

ブランコから若くしなやかな身体を反らせてぶら下がりながら、金色の瞳の乙女が言った。

「それが君がサーカスに入った理由だというのかい？」

リハーサル中のステラが危険な技で怪我をしないように注意深く観察しながら青年は訊く。

「そうよ、ヨナタン。約束したでしょう？」

「白い花を出会いの時に渡した男が次に会った時に赤い花を持って迎えにくる」

二人は同時に笑いながら言った。

色とりどりの電球がもの哀しく照らすテントは１０年前と変わらない。同じ村の、同じ風がはらはらと紙吹雪を散らす。

ブランコ乗りの乙女に愛されない惨めなピエロを演じる為に施した哀しい化粧の下に、若い朗らかな青年の顔が隠れていることを、ステラは知っている。

ヨナタンがイタリア人ではない事もパスポートのない事も知っている。それは先月引退したジュリアに代わりチルクス・ノッテの新しいブランコ乗りになってわかった事だ。

けれど、ステラにとっては、紅い薔薇の方がずっと大切な秘密だった。十年かかったの。でも、ようやくつかまえた。ずっとあなたのそばにいるからね。

本番は二時間後に始まる。チルクス・ノッテは今日も満員御礼だった。

夜のサーカスと金の星

ゆっくりと右のかかとを持ち、そのまま前方へと伸ばす。かかとの位置を次第に挙げながら右横へと移動させる。かかとは彼女の頭よりはるかに上にきて、長い足はぴったりと彼女の右のラインに張り付く。白いレオタードをまとった若い肢体が朝の光に浮かび上がる。

ステラは、イタリア人らしくない自己克己の持ち主だった。たとえ昨晩のショーが夜中に終わろうと、今日が日曜日であろうと、常に朝の七時には一番大きいテントの円舞台の上で、バレエのレッスンを始めるのだった。

彼女は今年の秋に十七歳になる。学校の教師はステラに大学で法律を学べるよう高等学校への進学を勧めたが、きっぱりと断った。

「なんと言ったのかね？」

先生の呆けた顔を思い出して、ステラは忍び笑いをした。進学を断る時に、サーカスに入るからと伝えたら、先生は一分ほど口を開けたまま、何も言わなかったのだ。

「チルクス・ノッテです。先週、入団テストに受かったんです。狭き門だったんですよ」

先生はステラが子供の頃から熱心にバレエと体操を続けている事は知っていた。けれどブランコ乗りだって？　まさか！

ステラの住む町は、北イタリアのピアチェンツァから遠くない山の中にある。かつてこの地を治めていた、あまり裕福でなかった領主が残した城は、規模がお粗末で観光客も滅多に来ないため、年間を通じてとても静かだった。かつては牛の競売がされていた大きな広場は、今では通常は街を訪れる人たち用の駐車場として解放されている。三百台くらい収容する事が可能だが、ステラは五台以上車が停まっているのを見た事はなかった。

数年に一度、イタリア中を回っているチルクス・ノッテがこの巨大で誰も使っていない駐車場にテントを張る。本来ならばサーカスが回ってくるほどの集客力のある町ではないが、近隣のどこにも、このような開けた平らな空間がなかったので、この町に例外的にやってくるのだ。お陰で近隣の町や村からも、観客が訪れ、この期間だけは町も活氣にあふれる。ステラの母親が経営している小さなバーも、そのおこぼれに与っていた。

チルクス・ノッテに入団するまで、ステラは海を見た事がなかった。海に沈む真っ赤な太陽も、それから、その後に強く光り輝く海上の金星も知らなかった。太陽がトマトのように赤く熟れていく。赤い丸い太陽は、道化師の付け鼻にそっくりになる。

「あなたの鼻みたいね、ヨナタン」

そういうと、ごく普通の目立たない服装の青年が、ほんのちょっと不満に鼻を鳴らした。

「そういう、ロマンに欠ける感想をもらすのは、どうかと思うよ」

でも、これは私にはとてもロマンティックな喩えなの。入団した時は、ヨナタンが十年前に出会った小さな少女を憶えているか、ステラには定かではなかった。十六歳になれば、彼女にもわかる。六歳の時に、舞台の前で渡された紅い薔薇が、本当に愛する人を迎えにきたサ

インではない事が。

「白い花を出会いの時に渡した男が次に会った時に赤い花を持って迎えにくる」

この地方に、いにしえより伝わるおとぎ話。母親のバーで、まだ少年だったヨナタンに白い花を渡されたときから、ステラは決心していたのだ。この人が、私の王子様だから、それにふさわしくなるのだと。だから、ステラはブランコ乗りになった。

幼稚園の鉄棒でジュリアのように美しく大車輪をしようとして怪我をした。ブランコもあれ程高くは揺れなかった。ステラは、悔しくて泣いた。サーカスに入ってブランコ乗りになりたいと言ったステラを誰も本氣にはしなかった。たぶん、ステラ自身も習いはじめたバレエや体操の魅力の延長として言っているのか、子供の頃の夢物語の延長として言っているのかはっきりしていなかった。そう、十一歳のあの夜まで。

五年ぶりにやって来たチルクス・ノッテ。ステラは母親に頼んで再び連れて行ってもらい、同じピエロが人々に笑われているのを見た。転んで、自分の大きなボールに追い回されて、それでも紅い薔薇を捧げながら美しいブランコ乗りの姫を追っている。ヨナタン！　ステラは六歳の時とは違って少し後ろにいたので、ピエロに声をかける事はできなかった。舞台がはねた後も忙しい母親に連れられてさっさと帰ったので、「私を憶えている？」と声をかける事も出来なかった。

ステラは、別の夕方、そっとテントの林の中を進んだ。異国の哀しい雰囲気を醸し出す色とりどりの電球。少し色あせたテントの合間。夕闇の中、ステラは人影のないキャラバンの間を、歩いていった。一番奥の、小さなキャラバンの脇に、誰かが立っていた。水色のチェックの半袖シャツに、色のほとんどなくなってしまったジーンズ。そっと背を丸めて煙草に火をつけていた。それから空を見上げてすうっと煙を吐いた。空間に溶けてしまいそうな、特徴のない立ち姿。目立たないように控えめに立つその姿は、少年の華奢な体型から立派な青年のそれに変わっていても、見間違えようがなかった。誰にも見つからないように、誰の邪魔にもならないように、ひっそりと立つその姿に、あのおかしなピエロの面影はどこにもない。夕陽に彩られた横顔にわずかな疲れが見えた。誰にも理解されずに生きる、逃亡者の虚しさが。

ステラがそっと話しかけようとしたその時、大きなテントの中から逆立ち男ブルーノの野太い怒鳴り声が聞こえた。

「ヨナタン！　来てくれ。ポールが曲がっているんだ。建て直さなきゃ」

ヨナタンは短く「ああ」と答えた。胸ポケットから小さな携帯灰皿を取り出すと、火を丁寧に消してしまい、立ち去った。ステラは、その場にしばらく立ちすくみ、夢のようなその一瞬を噛み締めていた。その夜、ステラはバレリーナになる夢と体操選手になる夢を消した。私は、あなたの側に行く。

入団してひと月目の週末、花形スタージュリアの引退興行をステラは舞台の袖からそっと眺めていた。舞台の強いスポットライトの中、光り輝くジュリアをピエロは追いかけてゆく。光の中で姫は天女のように舞う。スパンコールとラメに満ちた羽飾りがキラキラと光る。人々は拍手喝采を送る。もうじきだから。ヨナタン。来週からは、私

だけを追いかけてきて。
　道化師は、舞台がはねる直前、ふと、舞台の中央最前列の席をみつめる。大人が座っている事もある。楽しそうに笑っている男の子がいる事もある。ピエロはそこに、泣きそうな幼い少女がいない事を確認して、安心したかのように舞台を後にする。ステラは、舞台の袖でそれを見ている。大丈夫。きっとあなたは憶えている。
　ブランコの上からゆらりゆらりと見る世界は、全く違っている。地上の観客や、威張りくさったブルーノや、馬やライオンが、小さく見える。そして、彼がじっと見つめているのがわかる。紅い薔薇を持って追いかけ回す、おかしな姿のピエロ。白地に赤い水玉のサテンのだぼたぼな服を来て、よろよろと舞台を駆け回る道化師。私に何かが起こったら、ネットと両手を拡げて受け止めてくれる人。

　舞台が終わると、ピエロは化粧を落としてヨナタンに戻る。団長夫人におさまったずっと年上のジュリアを追い回す事は全くなくて、入ったばかりのステラにもただの優しい同僚以上の関心を持たなくなる。
　この間のリハーサルの時に、ようやく私があの時の少女だと伝えたけれど……。ヨナタンは多分あの私の告白を冗談だと思っている。誰がおとぎ話を真に受けて、たった一度会ったピエロを１０年も待っているだろうか。
　それでも、ステラはロバのごとく頑固だった。連れて行ってくれないならば、私が自分で追いかけていくから。キャラバンに忍び込んで。ライオンや馬に乗って。火の輪と鞭の林をくぐり抜けて。海に眠りゆく真っ赤な太陽のすぐ側で、輝きながら子守唄を歌う宵の明星になる。
　ステラは、準備体操を終えると、新しい回転技の練習をするために鉄棒にぶら下がった。

夜のサーカスと孔雀色のソファ

暗転していた舞台が次第に明るくなる。円舞台の中央に緑色の何かが見える。明るくなるに従って、それが大きなレカミエ・ソファである事がわかる。滑らかなマホガニーの枠組みで薄緑地に鮮やかな孔雀色のペイズリー柄が浮き出ている豪華なものだ。ソファの曲がり足は獅子の前足の形になっているに違いないが、それを確認しようとする観客はいない。なぜならば、その足元に、本物の雄ライオンが寝そべっているからである。

ソファの上も空ではない。なめかましい曲線を描いて女が横たわっている。光り輝く鱗のような孔雀色のドレスを身にまとい、黒い肘まであるシルク手袋をして、スリットからはみ出た長い足を組んでいる。観客からは女の顔は見えない。ただ、黒いシルクハットが見えているだけだ。

女はシルクハットで顔を隠したまま、ゆっくりと8センチヒールを履いた足を高く大げさに交差させて、ライオンの前に立ち上がった。後ろを向くと左手に持った帽子をゆっくりと頭から外した。ストロベリー・ブロンドの豊かな髪が大きく開いた背中にはらりと流れ落ちる。右手がシルクハットから黒い鞭を取り出す。女が振り向き、鞭が空氣を切り裂いて振り落とされると、舞台に壮大なオーケストラのメロディが流れる。ライオンがそれを合図に立ち上がり、ソファに飛び上がって後ろ足だけで立ち上がる。《ライオン使いのマッダレーナ》の登場だ。

ローマから始まった新しいシリーズの興行は、マッダレーナの再デビューと言ってもよかった。チルクス・ノッテがまわってくる度に来る観客の多くが、すでに《ライオン使いのマッダレーナ》の演技を目にしていた。彼女は、五年もチルクス・ノッテに属していた。だが、彼らは、かつて見たライオン使いの女と、今ここに現われた美女とが同一人物だとは簡単にはわからなかった。それほど、彼女のイメージは変わっていた。

前回までの興行には、花形スターのブランコ乗り、ジュリアがいた。チルクス・ノッテの女帝は、自分よりも若く美しい女が脚光を浴びて賞賛を受ける事を頑強に拒んだ。マッダレーナは、薄化粧に灰色のつまらないパンタロン姿、シニヨンにしたひっつめ髪で、大した工夫もなくライオンに芸をさせる事しか許されなかった。

「この演目の要はライオンでしょ？　あんたが目立っちゃ意味ないじゃない」

けれど、ジュリアが引退し、チルクス・ノッテには新しい花形スターが必要だった。団長夫人となり、興行の収入が財布の厚さに直接影響するようになったジュリアもそれは認めざるを得なかった。そして、新米のブランコ乗りのステラには、新しいスターの役割をこなすのは到底無理だった。そう、どう考えても二十四歳のマッダレーナ以外に考えられなかった。彼女は、碧とも翠ともつかぬ、ガラス玉のような瞳を持っていた。柳のように細く形のいい眉、口角の上がった下唇が厚いなめかましい口元。妖艶で強烈な個性を持った女盛り。ライオンの陰に隠しておく必要などないのだ。

さあ、私を見て。これが本当の私なの。マッダレーナは、これまでは禁じられていたセクシーな歩き方で舞台を横切る。マッダレーナの美しい動きに合わせて、雄ライオンは舞台を自在に飛び回り、逆立ちをし、玉乗りをした。マッダレーナはレカミエ・ソファの艶やかなマホガニーの肘掛け枠をなめかましい手つきでなで、その後ろから黒く長いキセルを左手に持って取り出す。天上から大きな輪がゆっくりと降りて来る。マッダレーナは長い仕掛けキセルを近づける。火種が輪に乗り移り、あっという間に焔が広がる。ライオンは、彼女の大切なヴァロローゾは、マッダレーナの凛とした鞭の音に合わせて、勇猛に火の輪をくぐってみせる。男の観客はその官能的なショーに、女と子供たちはライオンの見事な動きに大喝采を送る。新たなスターの誕生だった。

マッダレーナは、ケニアで生まれ育った。彼女の父親が「アフリカの日々」に憧れて、マサイ・マラでライオン・ファームを経営する事にしたからだ。彼女は子供の頃からライオンの間で育った。まるでヨーロッパの子供たちが大きな飼い犬と仲良くするかのように、ライオンたちに囲まれて育った。一番仲が良かったのは、スワヒリ語で《勇者》を意味するジャスィリと名付けられた雄ライオンだった。彼は名前にふさわしく勇猛で美しかった。マッダレーナはジャスィリに抱きつき、背中に乗りその手から食べ物を与える事が出来た。

しかし、彼女の幸福な少女時代はある日いきなり終わった。他ならぬジャスィリが父親と母親に襲いかかり、かみ殺してしまったのだ。突然、孤児になったマッダレーナはイタリアに戻る事になった。親戚の家をたらい回しにされたあげく、孤児院に預けられた。やがて自活して生活する事を強制されたとき、マッダレーナが選んだ職業は「ライオン使い」だった。それはとても自然な選択だった。というよりは、マッダレーナに出来るまともな仕事は、他にはなかったのだ。

8年間、マッダレーナは何匹ものライオンを飼育した。しかし、ヴァロローゾほどしっくり来るパートナーははじめてだった。奇しくもジャスィリと同じく《勇者》を意味するイタリア語を名に持つライオンは、マッダレーナが遇ったどの人間の男よりも逞しく、精悍で、勇猛だった。

ヴァロローゾは鞭など怖れていなかった。その証拠に、マッダレーナ以外の誰が鞭を振るっても、前足を上げたりなどしなかった。それどころか、反抗的で冷たい目を向けて唸る。鞭を振るった人間は、あわててマッダレーナの陰に逃げ込むしかなかった。彼は、自分の意志でマッダレーナに協力しているように見えた。彼女の演技にあわせて、前足を掲げ、ソファに駆け上がり、そして火の輪をくぐる。求めるのは、マッダレーナの信頼と、日々の丁寧な毛繕いだけ。ヴァロローゾは、マッダレーナと対等の存在だった。その最良のパートナーとこの瞬間をともに過ごせて彼女は、幸福だった。

舞台がはねた後、マッダレーナは化粧を落として白いシャツとジーンズに着替え、舞台の裏に置かれたレカミエ・ソファにゆったりと腰掛けて煙草を吸った。勝利の味がする。長い髪をかきあげて顔を上げると、いつものように興行後の舞台の点検をしているヨナタンの姿が目に入った。

「あら、いやだ、いたの？」

ヨナタンは、ちらっと彼女を見たが、すぐに目を舞台に戻した。
「ああ。驚かせたなら、すまない」
マッダレーナは、くくっと笑って言った。
「別に。それはそうと、お礼を言わなくちゃね。ありがとう」
「何に対して？」
ヨナタンは大して関心がないように訊き返した。
「あなたが提案してくれた事に対してよ」
そもそも、団長やジュリアはマッダレーナを派手にセクシーにする事は考えていたが、こんな演目にする事は考えていなかった。さまざまな小道具を取り出す大道具も、単なる箱を用意するはずだった。

「もっとエレガントにした方がいい」
ふだん、演目の事には口を出さないヨナタンが、会議の時に珍しくはっきりと言ったのだ。夜会服のようなドレス。シルクハットと長い手袋、黒いキセル、そして豪華なギリシャ風のレカミエ・ソファ。その提案に団長たちは目を丸くしたが、確かに斬新で美しい演出だった。大道具小道具を用意するコストもほとんど変わらなかった。その提案は、大きな成功を収めたのだ。
ヨナタンは、そんな当たり前の事、というような顔をして笑った。マッダレーナはソファに寝そべるようにして、妖艶な笑顔をヨナタンに向けた。
「どこからこんなアイデアがわいてきたの？」
ヨナタンは短く答えた。
「人生で目にした色々なものから、ね」
「レカミエ・ソファなんて、どこで目にしたのよ」
ヨナタンは答えなかった。マッダレーナは、ふふん、とわかったような顔をして煙を吐いた。謎に満ちた過去のない男。十年くらい前に、突然団長が連れて来たっていうけれど、いったい何者なのかしらね。
「まあ、いいわ。ところで、明日のショーは、あのお嬢ちゃんの出番よね。また早朝からのリハーサルにつき合うんでしょ。早く寝なさいよ」
彼はちらっと女を眺めると、何も言わずに点検に戻った。余計なお世話だと態度が語っていた。マッダレーナは、無言の非難などにへこたれるようなタイプではなかったので、再び煙を吐いて笑った。

ロボットみたいに正確な日常を繰り返す、この謎の青年は実に興味深かった。マッダレーナは、どうやって攻略していこうかそれを考えると楽しくてならなかった。
年増女の引退以来、すべてが上手くまわるようになって来たみたい。不遇の時代が続いたけれど、チルクス・ノッテからさっさと逃げ出さなくてよかったわ。マッダレーナは、テントを出ると煙草を投げ捨てて、大事なヴァロローゾの様子を見に歩いて行った。

夜のサーカスと南瓜色の甘い宵

オレンジに近い暖かい黄色のナフキンがしっかりと口の周りの汚れを取り去る。たっぷりとしたオリーブオイルのせいで、赤い口紅も一緒にナフキンについてしまった。まあ、いいわ。しみを落とすのは私ではないし。揚げカボチャのニンニク油マリネ。美味しい前菜だった事。ジュリアは空になった皿の上を眺めた。その奥には蝋燭が穏やかな焔をくゆらせている。ナフキンと同じ色のテーブルクロスのかかったテーブルの先には、その男が座っている。ジュリアの夫、ロマーノだ。馬の曲芸師として知られた男、そして、イタリアではそこそこ名を知られるようになってきたサーカス団「チルクス・ノッテ」の団長でもある。

この男と結婚し、団長夫人としての地位を確立したので、彼女はこのような優雅な晩餐を楽しめるようになったのだ。そうでなければ、今ごろは共同キャラバンの中でブルーノやルイージなんかと一緒にまかない飯をかきこんでいた事だろう。サーカスのスターとして永らく「チルクス・ノッテ」に君臨したけれど、ただの団員としての共同生活には特別扱いは許されなかった。そういうものだし、今後もそうあるべきだ。ジュリアは給仕をするマルコをちらりと眺めた。茄子のスパゲッティ。ロマーノは、大して贅沢をしたがらない男だが、食事にだけはこだわりがあった。料理人として雇われているダリオは、安くてボリュームのたっぷりなまかない飯を作る腕前も大したものだが、それと平行して、レストランでも滅多に食べられないようなコースを用意する事が出来るのだった。

「セコンド・ピアットは鹿肉だよ、かわいい人」

ロマーノは、キャンティのグラスを掲げて微笑んだ。ジュリアもグラスを持ち上げて笑み返した。夫を心地よくすること、それは彼女の数少ない義務だった。それでいいのだ。ロマーノが私だけを愛しているかどうかなんて、どうでもいいこと。私には関わりのない事だから。

テーブルの上の蝋燭は小さなカボチャをくりぬいた、ハロウィンのランタンに入っていた。今日は十月三十一日。アメリカから来た浮かれた商業主義がこのイタリアにも広がりつつあるけれど、私には関係ない。明後日の万霊節には、教会に行くでしょう。父親や母親、祖父母のため、教会に行くことを止める夫などいやしない。だから、私はこの日には一つの魂のために心置きなく祈る事が出来る。本当に生涯を共にしたかった、たった一人の男のため。

ジュリアは、ちょうど今のステラぐらいの年齢から、ブランコ乗りとして働いていた。いくつかのサーカス団に勤めたが、芽が出たのはトマとコンビを組んでからだった。ナポリ出身の小柄なブランコ乗りは、怒りっぽくて、腹が立つと誰かれ構わず殴り掛かる困った性格だった。美しいジュリアにすぐに夢中になり、彼女が他の男に微笑みかけたりすると猛烈に嫉妬をした。それを鬱陶しく思った事もあるけれど、彼が突然いなくなってしまってから、どれほど自分が彼の束縛を必要としていたか理解したのだ。トマ。あなたは今どこにいるの？

鹿肉の猟師風を食べ終えると、ジュリアはふうっと息をついた。明

日と明後日は聖なる休みだ。つまり、興行は出来ない。だから、ロマーノは明日を移動の日に当てる事にした。興行収入のためだから仕方ないだろう。いずれにしてもジュリアはさほど信仰深い方ではなかった。むしろ明日教会に行けないということは、なおさら明後日教会に行くことが自然に映るだろう。トマの命日には、ジュリアは教会に行ったり、ことさら神妙にしたりはしなかった。ロマーノと食事をし、後援者達と逢う事があれば楽しく騒いだ。誰もが、さっさと次の利用可能な男に乗り換えた、現金な女と思っている。それのどこがいけないというのだろう。たった一人の男の事を胸に秘めているなんて、だれにも氣づかせる必要はない。そんなことは誰の役にも立たないのだ。

「ねえ。このカボチャの蝋燭、今日だけなの？」
ステラは、かわいい細工に目を輝かせた。共同キャラバンの長いテーブルの上にもそれは置かれていたのだ。
「いや、去年は一週間くらい、置きっぱなしだったよな」
エミーリオが問いかけると、ヨナタンが頷いた。マッダレーナはフォークの柄でカボチャ細工を軽く叩いて言った。
「ダリオって、本当にこういうデコレーションが好きよね。氣にいったなら、そう言ってあげなさいよ。これまであたし達、ほぼスルーしていたから」
「こんなにかわいいのに？」
「まかないの食事なんて、お腹にたまればそれでいいのよ」
スパゲッティーを食べ終えると、マッダレーナはワインをくいっと飲み干して、早々に煙草を吸いに出て行った。エミーリオがそれに続く。ヨナタンも喫煙派だが、特に急いで行く氣はないらしかった。

入団して以来の共同生活に、ステラはようやく慣れてきた。ステラは最年少で新米だったが、持ち前の人なつっこさで、ほどなく溶け込む事が出来た。ピエロのヨナタン、逆立ち男のブルーノ、ライオン使いのマッダレーナ。馬の世話と団長の下僕のような事をするマルコとエミーリオは双子だった。寡黙な綱渡り男ルイージや、おいしい食事を作ってくれるダリオなど、年配の仲間もいた。
ヨナタンの側にいたい、それだけで入団テストを受けたステラだった。でも、チルクス・ノッテでの生活は、寝食を共にする仲間と上手くいかなければやっていけないのだと実感した。マッダレーナやブルーノのように、自分のやっている事に自信があって、相手に有無を言わせない強さがあればまだしも、ブランコ乗りとしてはまだ一人前とはいえないステラは、ここで敵を作りたくなかった。
一番怒らせてはいけないのは、団長とジュリアだった。ジュリアは団長夫人というだけでなく、ステラのブランコ乗りの教師だった。実を言うと、ステラがかなりの倍率の応募者の中から新しいブランコ乗りに選ばれたのは、素人だったからだ。彼女はバレエと体操をずっと続けていたし、体操ではオリンピックの選考大会にも出場するほどの技術を持っていたが、ブランコ乗りをやった事はなかった。したがってジュリアが「こうしなさい」と言えば反論をせずに努力した。
ジュリアは「六歳の時に、チルクス・ノッテのブランコを見て以来ずっとブランコ乗りになりたかった」というステラの応募動機を、自分に憧れての事だとよく理解していた。まさか、ピエロに追ってきてもらいたいからなんて、誰が思うだろう。もちろん、入団以来のステラの

態度で、彼女がヨナタンにただの同僚以上の好意を寄せているのはすぐにわかったが、それもジュリアにとっては悪い事ではなかった。ロマーノに色目を使われるより、ずっといい。

明日が移動の日なので、サルツァーナでの興行は今日の昼までだった。だから、チルクス・ノッテの仲間達は、いつもよりずっとのんびりとした夕食を楽しむ事が出来ているのだった。

「ねえ。今夜はハロウィンでしょ。あちこちで飾り付けしているんじゃないかなあ。明日は移動で忙しいし、今夜のうちに街の様子を見に行くのはどうかしら」

ステラはおずおずと提案してみた。ブルーノが馬鹿にした様子で鼻を鳴らす。

「アメリカの習慣だろ。何もやっていないさ」

「そうかなあ。この間、移動の時にちらっとみたけれど、ショーウィンドウには……」

ステラはなおも食い下がった。サルツァーナに来るのははじめてだったし、興行中にあった休みではジュリアがたくさんレッスンをつけたので、他の仲間達のように街の散策などにいく時間がなかったのだ。

がっかりするステラを見てヨナタンは言った。

「腹ごなしに、少し散歩でもするか」

ステラは目を輝かせた。ブルーノは意地悪く言った。

「俺も一緒に来ようか？」

ステラは困ってもじもじした。本当はヨナタンと二人だけで行きたいけれど。ブルーノは笑って「け。正直な顔をしてらぁ」と言って、出て行ってしまった。

「言っておくけれど、この時間だから、どこも閉まっていると思うよ」

「そうよね。でも、街の中をちょっと歩ければ、それでいいの」

石畳の道を歩いて行くと、だんだんと街の灯りが見えてきた。街灯に照らされてパステルカラーでとりどりに彩られたサルツァーナの街が幻想的に浮かび上がった。人々が酒を飲んで騒ぐ声が聞こえてくる。中心街に出たようだ。

「あっ。ほら。ハロウィンの飾り」

菓子屋のショウウィンドウは大きなカボチャのランタンと、箒にまたがる魔女のデコレーションがされてオレンジ色に浮かび上がっていた。駆けて行くステラを見て、ヨナタンは笑った。背伸びをしているが、まだ子供なんだな。

もう九時近いというのに、その菓子屋はまだ店番がいて鍵もかかっていなかった。ヨナタンはステラの後を追って入って行くと、いくつかの菓子を手に取って店員の所に行った。

「これください」

普段甘いものを食べないヨナタンがチョコレートやキャンディを買ったので、ステラは首を傾げた。ヨナタンは小さく笑って、菓子の袋をステラの手にポンと置くと、彼女の前髪をくしゃっと乱して言った。

「ほら、お菓子。だから、いたずらするなよ」

完全に子供扱いされていると思ったけれど、ステラはそれでも顔が弛むのを止められなかった。
「今、食べていい？」
「いいけど、あとで歯を磨けよ」
ステラは大きく頷くと、半透明の紙袋をそおっと開けた。あ、チョコレート・キャラメル。それにミント入りのチョコ。色とりどりの果汁入りキャンディもある。こんなにたくさん、大好きなものばかり。どれから食べよう？
「ヨナタンはいらないの？」
ヨナタンは少し考えてから、袋の中からキャラメルを一つとって食べた。
「甘いな。久しぶりだ、これを食べたの」
そうね。とっても甘い。この街、大好き。ハロウィンも大好き。次に行く街でも、こうやって夜の散歩が出来るといいなあ。

テント場に戻ってくると、煙草を吸っていたマッダレーナが声を掛けた。
「ステラ。今日の後片付け当番、あなただったんでしょ。やっていないって、ジュリアがおかんむりだったわよ」
ステラは飛び上がった。まずいっ。浮かれててすっかり忘れていた。あわてて共同キャラバンに戻ると、ジュリアがマルコと一緒にテーブルクロスを畳んでいた。
「す、すみません！　忘れていました」
ジュリアは息を切らすステラをじろっと睨んだ。
「どこに行っていたの」
「ちょっと、街まで……」
手にはまだお菓子の入った袋を握りしめている。それを見てジュリアは拍子抜けした。何をやっているんだか。
「とにかく、ちゃんと片付けなさい。それから、そのお菓子を置きっぱなしにしない事ね。明日にはなくなっちゃうわよ」
そういって、ミント入りチョコレートを一つとって口に入れた。
ステラは力強く頷いて、カボチャ色のテーブルクロスをどんどんと畳んだ。

夜のサーカスとチョコレート色の夢

船をみながら、海の向こうにあるというユートピアの事を考えた。どんな夢も叶うその楽園は「ヨーロッパ」というのだと、アマドゥが語った。少年はまだ小さくて、二歳年上のアマドゥの話す事はすべてが真実だと思っていた。欲しいだけ食べ物が食べられる。飲みたいだけ水が飲める。毛布には穴が開いていなくて、新しい靴を履けて、ラジオやナイフを独り占め出来る。

ラジオは「善きサマリア人の救護団」の事務所で見た。後ろに誰もいないのに、勝手に喋る魔法の箱。これはイタリア語というのだと、事務所のスタッフは言った。彼が住んでいる国には古来から話されている言葉があるが、植民地時代にはずっとイタリア語が公用語だったのだと、彼は言った。

「今は？」

「アラビア語だけれど、こういう奥地ではいまだにイタリア語しか出来ない人も多いのさ。それに、ヨーロッパではアラビア語のわかる人なんかほとんどいないからね」

彼らはイタリア語が出来るというので「善きサマリア人の救護団」に雇われていた。飢餓や戦争孤児のための援助をしている「ヨーロッパ」の非営利団体だそうだ。アマドゥに言わせれば、あの事務所にあるものは、それだけでも村一番の長老を遥かにしのぐ財宝で、あそこに勤めている奴らは、いつも美味いものを食えるらしい。

「じゃあ、大きくなったらあそこに勤めればいいじゃないか」

「無理だよ。町に住む有力者の息子だけが、あの仕事を貰えるんだ。それに、たとえあそこで働けても、海の向こうに行くような幸せは手に入らない。海を渡った本当の勇者だけが二度と心配のない楽園に辿り着けるんだ」

アマドゥがそう言うと、すべてはそれらしく響いた。

「だからよ。俺は金がいるんだ。海まで行くだけの」

アマドゥは「善きサマリア人の救護団」の事務所に金を盗みに入り、牢屋に入れられた。少年は、そんな馬鹿な事は、捕まるようなヘマはするまいと決心した。十四歳の時に、「善きサマリア人の救護団」のトラックに忍び込んで港へと辿り着く事に成功した。あとは船に乗り込めば楽園が彼を待っているはずだった。

楽園の人々は白い肌をしている。アマドゥはそう言っていた。白い肌だって？　そんな馬鹿な。けれど、港には、本当に白い肌をした人間がいた。目深に白い帽子をかぶり、肩に金モールのある白い立派な服を着て、ピカピカの靴を履いていた。ああ、これがアマドゥの言っていた楽園の住人かと思った。その男は、波止場の立派な船に乗った。それは大きな船だった。長老の家の五十倍近くあって、色とりどりの服を着た白い人たちが笑いながら甲板から海や港を眺めていた。

少年は、暗くなるのを待って、船艙に忍び込むことに成功した。実際は、波止場に積まれた麻袋の一つからトウモロコシの粉を海に捨てて、その中に入ったのだ。それから暗い船底で数日間を過ごした。そして、着いたのがカラブリアだった。

そこにはどんな夢も叶う楽園などなかった。「ヨーロッパ」という

国もなかった。少年が辿り着いた所はイタリアだった。住人たちは、少年の故郷のようには飢えてはいなかったが、ダークチョコレートと同じ色をした少年を暖かく迎えてくれるほど余裕があるわけでもなかった。彼らも、生きるのに必死だったのだ。

盗みをして捕まれば、アフリカに連れ戻されるのはわかっていた。だから、少年は金を稼がなくてはならなかった。出来る事は限られていて、貰える金も大したものではなかった。歌はうるさいと怒られた。ダンスをしたくても音楽がなかった。だから、逆立ちをしたのだ。軽々と両手で。ゆっくりと頭だけで。時おり片手で。これが一番実入りが良かったので、彼は、少しずつ難易度のある技に挑戦していった。

カラブリアに辿り着いて、半年ほど経った頃、はじめてあの男が観客に加わった。妙に背の高い、壮年の男で、ワインカラーに濃紺の縦縞のついた、目立つ上着を羽織っていた。そして、少年を念入りに見ていた。その男は服装も目立ったが、それだけではなかった。はじめて紙幣をもらったので、少年はどぎまぎした。

翌日も男は観に来た。三日目になると、少年は確信を持った。こいつ、興味があるのは逆立ちじゃない。俺の体だ。少年は、既に故郷で村の伝令の慰み者になった事があったので、またかと思ったが、それで美味いものが食えるのなら構わないと思った。

少年の印象は間違いだった。ロマーノは逆立ちにも興味があったのだ。

「お前、宿無しだろう」

ロマーノは聴き取りやすいイタリア語で話しかけた。連れて行ってくれたレストランで出てきたパスタに、少年は覆いかぶさるようにして食べた。噂に聞いていたコーラというものもはじめて飲んだ。少年は用心深く男の事を観察した。俺を当局に引き渡すつもりかもしれない。

「心配するな。私は法なんてものに、たいして価値を見いだしてはいないのだ」

ロマーノはくるんとした髭をしごいて言った。だから、なんだっていうんだよ。お前がしたいことは、わかってんだ。だけど、こいつは全部食わせてもらうぜ。少年ははじめて食べた、パフェというものに夢中になった。冷たくて、甘くて、美味しい。かかっているこの黒いものは、チョコレート・ソースっていうんだそうだ。

「私の所に来ないか」

ほら来た。

「今晩、ってことかよ」

ロマーノはにんまりと笑ってから、もう一度髭をしごいた。

それが、チルクス・ノッテに入った経過だった。団長のロマーノは、ブルーノ・バルカという難民の書類を用意してくれた。少年はバルカなる人物が実在するのかにも、どうやってその書類を手に入れたのかにも興味はなかった。強制送還されることがなくなった、それだけで十分だった。その日から彼はブルーノになった。

ロマーノは、まかないとはいえ、毎日うまい飯を食わせてくれた。

ホットチョコレートという飲み物もあった。どろりとしたほろ苦くも甘い飲み物は火傷しそうに熱かった。いくらすすってもねっとりとした液体はカップにこびりつく。苛つくが、一度飲んだら忘れられない。

それだけではない。ブルーノを曲芸師の学校に入学させ、きちんとした逆立ちの訓練もつけてくれた。華やかな逆立ち男の衣装の他に、スニーカーだの、Tシャツだの、すり切れていない自分だけの衣類を用意してくれた。穴の開いていない毛布もマットレスもある、凍えずに眠れる一人用キャラバンカーも貰えた。足りないものなどなかった。

時おり、我慢すればいいのだ。ねっとりと暗いチョコレート色の時間を。

大テントの東の入り口には、大きな姿見がある。鏡。故郷では、「善きサマリア人の救護団」の事務所で一度だけ鏡を見た事があるが、こんなにくっきりと姿が浮かび上がるものではなかった。そして、全身が映るものでもなかった。その姿見には、チョコレート色の男が映る。カジキの鱗のような青白いパンツを身につけ、頭には青と白のダチョウの羽を飾ったターバンが巻かれている。上半身は筋肉の盛り上がりごとに光が反射し、屈強な男の肉体美が強調されている。彼は、舞台の前にはこの鏡を絶対に見ない。

鏡には魔物がいて、見たものの戦意を奪う。村の長老が言った。戦の前には絶対に鏡を見てはならないと。迷信と仲間は笑う。だが、姿見の前に立った時のあの感覚は何だ。異形のものがそこにいて、吸い込まれていきそうになる。お前は誰だ、そこで何をしていると、疑問を投げかけてくる。あの逆立ちが、あの技が、お前に出来るのか？本当に可能なのかと。

鏡を見る代わりに、ブルーノは仲間を見る。重い棒を抱えて綱を一歩また一歩と渡っていくルイージや、黒い鞭を操ってライオンを自在に動かすマッダレーナ、いくつものボールをジャグリングしながら滑稽な動きで観客を魅了するヨナタンを見る。入ったばかりのステラのブランコの演技も、最近はようやく安定してきた。舞台に輝くスポットライトと観客の熱狂。ロマーノを馬車に載せて駆けていく馬達の地響き。袖の暗黒の世界から垣間みる、白く輝く熱狂的な舞台の世界。「ヨーロッパ」という名の楽園が顕在する一瞬だ。

そして、彼はそのかりそめの楽園に、厳かに足を踏み入れる。舞台の真ん中に置かれた円卓に昇っていく。熱いスポットライトがじりじりとチョコレート色の肌を焼く。グレゴリオ聖歌を彷彿とさせる男声合唱が響く。革製の取っ手を設置した身長ほどの棒が二本立っている。その取っ手を掌で包み込むように掴むと、腕の力だけでゆっくりと体を持ち上げていき、その上に逆立ちする。体の力が、血がゆっくりと中心に向かって固まっていく。完全な垂直になり動きが停まると、最初の拍手が起こる。それから足が開いていき T の字になって停まる。そのまま右手だけに重心を移して左手を真横にする。体をねじり足を前後に開いていく。

また両手で体を支えながら、足を Y の字にして観客の方を見る。驚き拍手をする大人たち、目を輝かせる子供たち、頬を紅潮させる若い娘たち。力強く、しなやかな動きは、人間の肉体がどれほど美しいも

のかを観客に見せつける。そこには、名前も移民も国籍も貧富の差もなくなる。輝くアダムの肉体だけがエデンに降り立つのだ。それがブルーノの逆立ち演技だっだ。

舞台がはねて、ごく普通の男女に戻った仲間達とともに、共同キャラバンカーで食卓を囲む。ポレンタとウサギのラグーをかきこみ、赤ワインを流し込む。料理人のダリオが出してくれた、チョコレートソースのかかったパンナコッタをすくいながら、ブルーノは目をつぶる。少年はかつて夢みていた。いつか、遠い楽園に行くのだと。二度と飢える事のない、いくらでも水の飲めるユートピアに。ここは、思っていた楽園とは少々様相が違う。だが、苦さと甘さを備え持つ甘露チョコレートのある「イタリア」も悪くはない。仲間の騒がしい会話に加わるべく、ブルーノは瞳をあけた。

夜のサーカスと無花果のジャム

朝のレッスンを終えてテントから出てきたステラは、仲間の様子がいつもと違うのに首を傾げた。団長が怒鳴っていて、ルイージがめそめそと泣いている。ヨナタンやブルーノが忙しそうに走っていた。だが、団長の説教の内容が、どうも変だ。ジャムがどうこうというように聞こえたんだけれど、まさか、この状況で、その単語は変よね？

「何故、予備を用意しておかないんだ。なくなりそうになったら、早めに言えばいいだろう？」

団長はまだくどくどと言っている。ルイージは手の甲で涙を拭った。

「まだひと瓶あると思っていたんだ。今晩は、渡れねぇ！」

「馬鹿を言うな。今から演目を変えるのが、どんなに大変かわかっているんだろう？」

「何といわれようと、ジャムなしじゃ演れねえ」

ステラはそっとマッダレーナに近づいた。

「何があったの？」

マッダレーナはかったるそうに煙をくゆらすと肩をすくめた。

「無花果のジャムが切れちゃったのよ」

ステラは、イタリア語がわからなくなったのかと思って、混乱したままライオン使いの女をじっと見つめた。マッダレーナは、ああ、と言って事情を飲み込めていない少女に説明してやる事にした。

「ルイージはね、羊のチーズに無花果のジャムをつけたものを必ず食

べてから、演技に入るの。あれがないとダメなんだって」

ルイージはバランス綱渡りをする男だった。大きな長い棒でバランスをとりながら、遥か頭上の綱を渡って行くのだ。猫背の小男で、中年にさしかかっている。もの静かな、平和を愛する細いたれ目の男を、ステラは好意的に見ていたが、いかんせん、あまりにも無口で、親しくなるほど口を利いた事がなかった。

「羊のチーズと無花果のジャム？　山羊やイチゴじゃだめなの？」
マッダレーナはふふっと笑った。
「ダメダメ。この世界って、験かつぎする人、多いのよ。味がどうとか、科学的証明とか、そういう話をしても無駄よ」
「マッダレーナ、あなたもおまじないするの？」
「私？　しないわね。でも、ほら。ブルーノは本番の前は鏡を見ないでしょ。それに、マルコたちは、目の前を黒猫が横切ったと大騒ぎしたりするし。ヨナタンがいまだに団長にオカマ掘られていないのも、その手の験かつぎの結果だしね」
ステラは最後の例にぎょっとして、もっと詳しく訊こうとしたが、その時、当の団長がこっちに向かってきたので口をつぐむしかなかった。
「マッダレーナ、スーパーには？」
マッダレーナは煙を吹き上げて答えた。
「ヨナタンが西のはずれの量販店を、ブルーノが中心部の小さな商店をあたっているわよ。双子とジュリアは、念のために共同キャラバンカーやテントの中を探すって」
「そうか。俺は隣町をあたってみるから、悪いがルイージが落ち着くまで見ててくれ」
「了解」
「無花果のジャムって、そんなに珍しいものだったかしら」
ステラも、近くの小さな商店に探しに行ったが、苺やアプリコット、チョコクリームに蜂蜜などはどこにでもあるのだが、無花果のものはみつからない。ルイージがそんなものを本番の前にいつも食べているなんて、全く知らなかった。それに、大の大人がジャムがないだけであんなに取り乱すなんて。
しばらく行くと、見慣れた男がいるのに氣がついた。大型トラックを運転する運送会社の男で、移動設営の時はいつも派遣されてくるので馴染みになっているのだった。ちゃんとした名前があるはずだが、誰もが《イル・ロスポ》と呼んでいた。ひきがえるという意味だ。丸くてひしゃげた顔がその両生類を連想させるのだ。
「こんにちは」
「おや、これはブランコ乗りのお嬢ちゃんだ。今日はオフかい？」
「違うんだけれど、みんなで無花果のジャムを探す事になったのよ」
「へ、ルイージのかい？」
《イル・ロスポ》にまで知られるくらい有名なのね。ステラは頷いた。
「それは困ったね。この辺では売っていないだろうな」
「どこに売っているの？」
「俺が最後に見たのはコルシカ島だな。南の方にはあるだろうけれど」
ルイージはシチリア島の出身だった。きっと彼にとっては無花果のジャムはお袋の味なのだろう。そう思ったら、それがないと演技が出来

ないと泣く彼の事がかわいそうになってきた。

テントに戻ると、ヨナタンが帰ってきていた。

「あった？」

ステラが訊くと彼は首を振った。

「ブルーノもダメだと言っていた。困ったな。夕方までに見つからないと、本当に舞台に穴があくからな」

ステラはふと思った。そうだ、ママにも協力してもらおう。

「あたし、電話してくる」

「無花果のジャム？」

マリは大きな声を出した。午前中からマリのバルでたむろしている村の常連が一斉に振り向いた。

「わかったわ、こっちでも探してみる」

電話を切ったマリのまわりに、男どもはゾロゾロと寄ってきた。

「今の電話、ステラからだろう？　なんだって？」

「この夕方までに無花果のジャムがどうしても必要なんですって。誰か持っていないかしら？」

「無花果の？　我が家にはないよな。けど、手分けして探すか。ステラはどこに居るんだ？」

「パルマの側らしいわ」

「ここから五十キロは離れているじゃないか」

マリは肩をすくめた。

「そのくらいの距離をとりにくるのは、問題じゃないくらい重要みたいなの」

「そうか。ステラのためだ、手分けして探すか」

彼らは仕事を放り出して、知り合いをあたりだした。もともと、大して仕事に身が入っているわけではなかったが。

マリのバルは司令塔になった。情報のまとめ役はパン屋のジャンだ。

「だめだったか。お袋さんのところもあたってくれるか。ありがたい、頼むぞ」

「おい、ルカはどこにいる？」

「今日は地域消防団の会合で、ボレに行っているよ」

「ちょうどいい、電話をかけろ。ボレでも訊いてもらえるしな」

「誰か、最近シチリアかサルジニアに旅行に行ったヤツいなかったか？」

「待てよ、確か、例のいけすかない銀行家の野郎、行ったばかりだぞ」

「ちっ。仕方ないけど、訊きに行くか」

「お、ルカから電話だ。銀行家はちょっと待て。え、おい、本当か？」

ジャンの笑顔に皆、期待して電話の周りに集まってきた。

「あったのか？」

「ブラボー」

ジャンは親指を差し上げた。

「わかった。すぐにステラに連絡する」

ジャンからの電話を受けて、ステラは狂喜乱舞した。

「あった、あったわ」

ジュリアをはじめ、メンバーが興奮してステラのもとに集まってきた。

「どこに？」

「カザルマッジョーレ。ボレの消防団にいる人のお母さんが五年前の無

花果のジャムを地下倉庫に置きっぱなしにしていたんですって。誰が取りに行く？」
全員が顔を見合わせた。車はない。団長は、探しに行ったままだ帰ってきていない。
「どうしよう。このままじゃ夕方になっちゃう」
落胆したルイージは再びめそめそと泣き出した。
「あ。《イル・ロスポ》が、この街にいた！」
ステラが叫ぶと同時に、今度は全員が走って運転手を捜しに行く事になった。ほどなくして、エミーリオが《イル・ロスポ》を見つけて戻ってきた。運転手は大型トラックでジャム一瓶を運ぶなんてはじめてだと言いながらも、笑って三十キロ離れた街へと向かってくれた。

夕闇が静かに降りてくる頃、広場には電球がつく。みんなが待ちわびるトラックの音が響いてくると、代わる代わるルイージに抱きついて歓声を上げた。やがて、急ブレーキをかけてトラックを止めた《イル・ロスポ》が助手席から引っ張りだしてきたのは、とてもジャムひと瓶には見えない荷物だった。
「何これ？」
大きな箱にぎっしりと詰まったジャムの瓶、瓶、また瓶。六十から七十個はあるだろうか。
「無花果は二十くらいしかないかもしれないと言っていたが、全部持って行ってほしいそうだ。ため込みすぎて、一生分を遥かに超えてしまったが、あの世まで持って行けないからって」
ほこりを被ったジャムの瓶を見て、全員が沈黙したが、やがてマッダレーナが笑い出し、他の皆も笑いながらイチゴジャムなど、無花果ではない分を取り分けて手にした。
「《イル・ロスポ》のおじさんも、どうぞ」
ステラが言うと、彼はウィンクして助手席を示した。ステラが覗くと、そこには大量のレモンチェロの瓶が積まれていた。
「これも持って行ってくれって言うんでね」

分厚くジャムを載せた羊のチーズを口に運ぶと、ルイージは満悦してナプキンで口元を拭った。それから重たい棒を軽々と担ぐと、舞台裏に向けて歩いて行った。仲間はその嬉しそうな様子に、ニヤニヤと笑いかけた。今日のルイージは絶好調に違いない。

夜のサーカスとノンナのトマトスープ

「さっ。食べよう」
マルコが言うと、みな、ワインを注いだり、パンを回したりしだした。
ステラは一つ空いた席を見て戸惑いながら見回した。日替わりで団長夫妻の給仕をしているエミーリオとマルコのどちらかがいないのは別として、他のメンバーは必ず揃ってから食べるのが普通なのに。
「ブルーノがいないわよ」
ヨナタンとルイージは顔を見合わせて少し上の方を見上げた。サラダを口に運びながらマッダレーナがあっさりと言った。
「今晩は、待たなくていいの」
「どうして？」
「ポールに登っているんだ」
答えたのはマルコだった。ポールって、舞台のテントを支えている、あれのことかしら？　だけど、どうして？　食事だって声を掛けてあげないのかな。
「大丈夫だよ。湯氣がポールの上まで届いたら、こらえきれずに降りてくるからさ」
そういってマルコは、ミネストローネの上で頭を揺すっていい香りを吸い込んだ。調理キャラバンでダリオが大鍋にたっぷり作るスープは、村の人間をも呼び寄せてしまうほどの香りの引力を持っていた。
しばらくすると、ものすごい音がして、ブルーノが駆け込んできた。戸口に立った彼を、全員が一瞬見た。ステラ以外はすぐに目を皿に戻して、食事を続けた。ステラの戸惑った顔に一瞬だけ氣まずそうな顔をした後、ブルーノは乱暴に自分の席に腰掛けると怒りながら食べだした。
「畜生。今度こそ、こんな所からおん出てやろうと思ったのに、何でこんなに美味いもん作るんだよ！」
共同キャラバンに隣接された調理キャラバンの対面の窓から、ダリオはじっとブルーノの様子を見ていた。うむ。今日もちゃんと食べているな、よかった。今日のデザートはレア・チーズケーキだ。ブルーノがパンナ・コッタと同じくらい好きなもので、ちょうど良かった。少しフルーツを足してやるか。
ダリオの心はペルージア郊外の小さな村の古びたキッチンに飛んでいた。柔らかい日差しが射し込む石造りの家はとても古くて、ガスなんてものは通っていなかった。しわくちゃの手が古ぼけたオーブンの扉を開けて、薪を中に入れたり、灰をかき出したりしている。オーブンの上には鉄の輪を同心円状にいくつも重ねたコンロがあって、その鉄の輪を取り退けたり、またもとのように置いたりして大まかに火力を調節するようになっていた。近くには、いつもしゅんしゅんと音を立てて黒い鉄製の窯にお湯が沸いていた。このオーブンのおかげで真冬でも台所とその背中合わせになった居間だけは暖かくて、学校から戻るとダリオは台所に直行して冷たくなった手足を温めた。
「今日ねぇ、ジャンニのやつと喧嘩したんだ」
そういうと、彼の祖母は、目を大きく見張ってどうしてと問いかけた。
「だって、あいつ、おいらのことをみなしごだって囃し立てたんだ。二度とそんなこと言えないように、徹底的に殴ってやるつもりだったんだ

けど」
「やめたのかい？」
「運悪く、先生が来ちゃったのさ。だけど、おいらはあいつのことを絶対に許さないんだ」
「ダリオや。そんなことで喧嘩をおしでないよ」
「そんなことじゃないやい。ノンナはあいつの方が正しいって言うの？」
「そうじゃないさね。ただ、喧嘩をするとお前も怪我をするじゃないか」
ダリオにとっては自分が怪我をするかどうかなど、大した問題ではなかった。ノンナはわかってくれないと拗ねた。けれど、ノンナは黙ってスープの鍋をかき回した。それから、顔を歪めて目の辺りをこすった。
ノンナはいつもそんな感じだった。記憶にもないほど昔、父親が出稼ぎに行った日から、ダリオはノンナと二人で暮らしてきた。ダリオはよく喧嘩をした。お前の母親は男を作って出て行ったと言われるのも、ニースで父親が死んでからみなしごだとからかわれるのも、自分だけ冷たい石造りの古ぼけた家に住んでいるのも何もかも腹立たしかった。
ジャンニの父親は町会議員で、セントラル・ヒーティングの効いた二階建ての家に住んでいた。彼の母親はダチョウの羽のついた仰々しい帽子を斜めにかぶって、フィアットで通り過ぎる。クリスマスや誕生日が過ぎると、ジャンニはピカピカの新しい靴や金のエンブレムのついたぱりっとした上着を着て学校に来る。その二日後はダリオの誕生日で、翌朝になると必ず訊くのだ。
「で、お前は何をもらったんだい？」
ダリオの誕生日には、ノンナがチョコレート・ケーキを焼いてくれた。甘いとろりとしたクリームが中からこぼれ出す特別な仕掛けになっていて、ダリオがこれを大好きだとノンナは知っているので誕生日とクリスマスには必ず用意してくれるのだ。時々焼き加減が違うと、ダリオは文句を言った。
「今日は火加減がうまくいかなかったんだね、ごめんよ、ダリオ」
ノンナは、古いオーブンをコンコンと叩いて謝った。ダリオは半日ほどふくれていた。他に何ももらえないのだ。ケーキくらい、美味しく焼いてくれてもいいのに。

ノンナは、絶対にヒステリーを起こしたり、泣きごとを言ったりしなかった。ダリオがふくれても、食事の時間になって帰ってこなかったために何度も温め直す羽目になっても、決して声を荒げたりしなかった。
「ダリオや。許しておくれ。次には上手く焼くからね」
「ダリオや。今度はもう少し早く帰ってきておくれ」
悲しそうにしわくちゃの顔を歪める。ダリオは、その時だけは、ちょっとだけ申し訳ないかなと思った。
ノンナの作るのパスタは絶品だった。いくつものスパイスを混ぜて、ことことと煮込んだソースが鼻腔をくすぐった。曲がった腰に手を当てて、小さな庭から掘り出してきたジャガイモやサラダがいつも食卓を賑わせた。トマトスープのおいしさは格別で、ダリオは何杯もおかわりをした。
「ダリオや。美味しいかい」
ノンナはしわくちゃの手で、ダリオの頭を何度も撫でた。
「かわいそうにねぇ。許しておくれよ。お前にもっと楽な暮らしをさせてあげることができなくってさ」

中等学校に入ってから、ダリオは古い石の家に寄り付かなくなった。

友達の家を渡り歩いたり、まだ許されていないのにバルやディスコに行き、街のごろつきの下働きをしたりして遊ぶ金を稼いだ。たまに家に戻ると、歳を取ってさらに悲しい顔をするノンナに荒い言葉を投げかけては背を向けた。もっとも、トマト・スープが出て来れば、それだけは喜んで食べた。

ノンナが倒れたという報せをもらった時、ダリオはディスコで騒いでいた。慌てて家に戻ると、ストーブが冷えていた。子供の頃から一度だって絶えたことのない火が途絶えていた。暗くて寒い台所でダリオは呆然とした。病院に駆けつけると、白い病室の中にベッドがぽつんと見えた。真っ白いシーツの中に申しわけなさそうにノンナが横たわっていた。小さく縮んだようだった。ダリオを見ると弱々しく笑った。

「ごめんよ。ダリオ、心配かけて……」

ダリオは、はじめて自分が失おうとしているものが何であるかを知った。セントラル・ヒーティングがない、金のエンブレムのついた上着がない、顔も憶えていない両親がいないなんてことは、ダリオを本質的に不幸にしてはいなかった。それなのに彼はいつも不満をぶちまけていた。最も大切な優しい愛の前で。暖かい火の絶えないストーブの前に立って、ダリオのすべてを受け止めてくれた優しいノンナ。ダリオはまだノンナに恩返しをしていなかった。ちゃんとした仕事に就いて安心させてもいなかった。心からの感謝をを身をもって示してはいなかった。

彼女は石の家に戻ることもないまま、ゆっくりとこの世を去っていった。ダリオは二度とあの美味しいトマト・スープを食べることが出来なくなったのだ。

料理人になると言い出したダリオを悪い仲間たちも、いい学校に行ったジャンニたちも、誰もが笑った。だが、ダリオはもう笑われることで腹を立てたりしなかった。ノンナのように、おいしい料理を作るのだ。ノンナが作ってくれたような、暖かくて優しいスープを作るのだ。ノンナに伝えられなかった氣もちを一皿一皿に込めるのだ。

ダリオは、ペルージアのレストランで十年ほど修行した。そして、ローマに店を出すという金持ちに誘われて、そこの料理長にならないかと誘いを受けた。ちょうどその頃、体を壊した友人に、彼が働いていたチルクス・ノッテのまかないの仕事を引き受けてくれないかとも頼まれていた。ローマで高い給料を得て、名声を得るか、それとも仕事を続けられなくなった友人に代わって、しがないサーカスでまかないの食事を用意するか。ほかの料理人だったら迷うこともなかっただろう。けれどダリオは、世界から押し出されたようなはみ出しものの連中を空腹のまま放置して、ローマの金持ちのためにしゃれた料理を作る氣にはなれなかったのだ。

相方のトマが死んで食べられなくなったジュリアのために、リゾットをつくってやった。そのジュリアにきつくなじられて唇をかんでいた、入団したてのマッダレーナのためにとっておきのオーソ・ブッコをつくってやった。故郷の女房に間男ができて離婚することになったと泣いたルイージのために無花果を使った特製の前菜を作ってやっ

た。そして、ロマーノと一緒の時間を過ごすことを強要されるごとにポールに登っていつまでも遠くを眺めるブルーノのために、ノンナの思い出のスープをつくってやる。

「くそっ。なんでこんなに美味いんだよっ」

ブルーノの罵り声が耳に入って、ダリオの心は調理キャラバンに戻ってきた。ダリオは冷蔵庫に手を伸ばし、用意しておいたレア・チーズケーキを型から取り出すと、人数分に手早く切り分けてデザート皿に取り分けていく。季節のフルーツをこんもりと飾ると、ラズベリーのソースを形よく掛けていく。ブルーノがポールに登った日には、仲間の誰かが自分のデザートをブルーノに譲ってやる。氣もちのいい連中だ。ローマのちょっと食べて残すような鼻持ちならない客のために働くよりずっといい。そうだろう、ノンナ？　ダリオは頷くと、明日の昼食の仕込みのために野菜の皮をむき出した。

夜のサーカスとわすれな草色のジャージ

オリンピックの選考から漏れたと知った時、マッテオは悲しいとか、悔しいとか思う余裕はなかった。この日が来る事は、予想していてもよかったはずだ。でも、心がついていかない。子供の頃から体操界で活躍する夢しか持ってこなかったからだ。

マッテオは二十歳だった。学校に行ったり、見習いを始めたりといった、新しい人生の切り直しをするには育ちすぎていた。かといって引退して悠々自適の生活をするほど歳をとっている訳でもなかった。ずっと体操しかしてこなかったのでカーブが下を向いた時にどうしたらいいかわからなくなるのはマッテオだけではなかった。

たくさんの仲間たちとしのぎを削ってきた。選抜選手を決めるための合宿に参加していた馴染みの少年少女たちは、大会の成績に応じていつの間にか少しずつ入れ替わった。マッテオは、同期の中ではいつも一番だったので、たくさんの出会いと別れを経験した。でも、それは他の誰かが出たり入ったりするだけで、彼の居場所は常に約束されていたのだ。これまでは。急に未来がなくなって、マッテオは途方に暮れた。

「望むのは優勝、少なくともイタリア代表になる事」

そう豪語してきたマッテオにみな賛同した。

「俺も」

「私もよ」

けれど、一人だけ、にっこりと笑って何も言わなかった少女がいた。

マッテオはその金色の瞳の少女の事を考えた。彼女は、もう選考会にも合宿にも参加しなくなった。他の子たちの場合とは違って成績が落ちたからではなかった。

不思議な魅力を持った少女だった。マッテオは彼女を十年ほど知っていた。彼女が合宿に連れられてきた時のことを、いまでも鮮明に思い出す事が出来る。まだ学校にも入っていな年齢の少女に彼は訊いた。

「君、小さいね。もう体操を始めたの？」

「大車輪を出来るようになりたいの」

そんなはっきりとした目標を六歳の少女が口にするとは夢にも思わなかったマッテオも、横にいた教師も驚いた。少女は、きらきらとした瞳を輝かせて言った。

「わたし、ステラよ。あなたは？」

ステラはとても優秀だった。しなやかで軽やかだった。床運動や平均台ではバレリーナのように美しく芸術的に動いた。段違い平行棒や跳馬は正確に、でもスピード感を持っていた。天性のものもあるのかもしれないが、それだけではないようだった。教師やコーチに言われたままに、得点の上がるような演技を目指す他の少女たちと、どこかが全く違っていたのだ。金色の瞳がいつもキラキラと光っていた。女性らしい柔らかな動きでマットの上を跳躍していった時、段違い平行棒で見事な大車輪をしていた時、平均台の上で意識を集中させて回転した時、全身から生き生きとした歓びが、隠しきれない情熱が溢れ出していた。確実に得点出来るように無難なステップを選んだり、コーチに言われたから見せる硬い作り笑いをする少女たちとはあまりにも違っていた。そのために、時として彼女の成績は芳しくない事があった。彼女は得点には興味がなかった。驚くほどの自己克己と努力をしていたが、目指しているのは大会での競技ではなかったのだ。だから、彼女はオリンピックで金メダルを穫りたいというような目標を口にする事はなかった。

彼は今、ジャージをボストンバッグに丸めて突っ込みながら、自分の行く末について想いを馳せている。世界選手権に、オリンピックにいけなくなったら、どんな人生が待っているかなんて考えてもいなかった。どこか田舎で体操の教師としての職を探すか。それともスポーツインストラクターになって都会の有閑マダムの相手をするか。ちくしょう。それはちっとも輝かしい未来には思えなかった。そう、あのステラが目を輝かしていたような、希望に満ちた未来には。

マッテオは協会の重い木の扉を押して外に出ると、木枯らしの吹くパルマの街をとぼとぼと歩いていった。風が木の葉をくるくると遊ばせて、ホコリが彼の目を襲った。くそっ。

かさかさ音を立てる枯れ葉の間に、しわくちゃになった一枚のチラシがあった。ふと足を止める。サーカス。チルクス・ノッテ。……チルクス・ノッテ？

「じゃあ、これで、さよならね」

半年前の大会が終わった日、ステラは握手を求めてきた。

「これでって、どういうこと？　来月には選抜の合宿があるよ」

「わたし、就職が決まったの。だから、もう競技には出ないの」
「嘘だろう？　君は入賞候補なのに。何か事情があるのかい？　お金の問題かい？」
ステラは生き生きとした瞳で微笑んだ。
「違うの。ようやく夢が叶ったの。私ね、サーカスに入ったの」
マッテオはぽかんと口を開けてステラの顔を見つめた。サーカス？

チルクス・ノッテは、そのステラが入団したサーカスだった。マッテオはあわててチラシを拾って指で丁寧に拡げた。そんなに古くないチラシだった。パルマでの興行は終わっていなかった。明日が最終日だ。ステラは、この街にいるんだ！　マッテオは、いま来た道と反対側、チルクス・ノッテのテントのある方へと走った。切符を手に入れるために。

＊　＊　＊

舞台には光があふれていた。妖艶で美しい女が、ライオンを操っていた。たくましく異国情緒をたたえた屈強な黒人が、見事な逆立ちをしてみせた。赤い水玉のついた白いサテンの服を来たピエロが滑稽ながらも鮮やかなジャグリングをしていた。派手な縞の服を来た男が操る馬たちの曲芸。観客の叫びと、喝采の中で場内は熱い興奮に包まれていた。
やがて、照明は清らかな青に変わった。静かで宗教的とも思える音楽とともに、先程の道化師が紅い薔薇を手にして舞台に上がってくる。彼は憧れに満ちた様子で上を見つめている。その先に眩しい蒼い光が満ちて、ゆっくりとブランコが降りてきた。ゆったりとしたワルツに合わせて、ブランコは大きく揺れだす。神々しいほどの優雅な動き。彼女はブランコから、道化師めがけて飛び降りるかのように宙に飛び出す。けれどももちろん落ちたりなんかはしない。見事な回転のあとで、しっかりとブランコを掌でつかむのだ。
マッテオは、その回転が体操界でなんと呼ばれるものか、すべて言う事が出来た。けれど、そんなことはここでは全く意味がなかった。落ちるかと思ったのに、足だけでブランコに引っかかる。片手だけでぶら下がりながら、美しいアラベスクのポーズをとる。ステラの動きの一つひとつに、観客から大きな拍手が起こった。
喝采を浴びながら、道化師の優しい眼差しのもとで、超新星が爆発したごとき猛烈な輝きを放っている。仲間の体操選手たちの中で、一人だけ違う方向を見つめていた少女は、ここを目指していたのだ。何十人もの選手の中に埋没した一人としてではなく、何百人もの観客の視線を一身に集めていた。そして、光の中であふれる生命力と、息苦しくなるような哀しみと、狂おしい歓びを謳歌していた。なんという美しさだろう。マッテオは強い憧れがわき起こるのを感じた。これが彼女の言っていたことなんだ。
「ようやく夢が叶ったの。私ね、サーカスに……」

カーテンコールが終わって、観客がどんどん去っていっても、マッテオはずっと席に座っていた。
抱えているボストンバックには、イタリアチームの青いジャージが入っている。どうする？　もう一度体操界でトップになるために、そして、いずれは失ってしまう場所を勝ち取るために、高得点のためだけの技術を競うか？　このまま、諦めて、イゾラの街に帰るか？　そ

れとも……。マッテオは暗くなった誰もいない客席で、舞台を見つめたままじっと座っていた。

舞台に小さな光が点り、薄紫のシャツにジーンズ姿の一人の青年が入ってきた。そして、膝まづいて、端から舞台のナットが弛んでいないかを点検しだした。慣れているらしく、正確で素早い動きだった。そして、よどみなく移動していく。彼が三分の一ほどの点検を終えた所に、ぱたぱたと音がして青色の何かが走り込んできた。

「あ、いたいた。ヨナタン！」

その声は、間違いなくステラだった。目を凝らすと、少女は先程の輝く美しい衣装とは打って変わり、明るい金髪をポニーテールにして、マッテオとお揃いのわすれな草色の、つまり、イタリアチームに支給されたジャージを着ていた。何を着ていても、彼女の生き生きとした様子は変わらなかった。いや、むしろ際立って見えた。

ヨナタンと呼ばれた青年は膝まづいたまま顔を上げて、すぐ側にやってきたステラを見た。

「あのね。マルコたちが街のバルに行くんだって。マッダレーナとブルーノも行くみたいだし、ヨナタンも一緒に行かない？」

ヨナタンはすっと立ち上がった。ステラよりも頭一つ分背が高い。彼女を見下ろすと、優しく静かに言った。

「この点検が終わったら行くよ。先に行っていてくれてもいいよ」

ステラは大きく首を振って答えた。

「着替える前に、どこで待ち合わせるか、みんなに訊いておくね。点検が終わるまで待っているから、一緒に行かない？」

ヨナタンは同意の印に、片手でくしゃっと彼女の前髪を乱してから、その小さな背中をやって来た方向へと押した。スキップするようにステラが去ると、青年は何事もなかったかのように点検を続けて、終わりが来るとすっと立ち上がり、舞台の電灯を消して立ち去った。

マッテオは、立ち上がった。テントの出口を手探りでみつけて月夜に躍り出ると、雄牛のような勢いで、キャラバンカーのたくさん並んでいる所に向かった。

「すみません！」

たまたますれ違った中年の男を捕まえると、つかみかからんばかりに責任者に会わせて欲しいと頼み込んだ。よく見たら、それは先程、舞台の上で綱渡りをしていた小男だった。マッテオの態度に怯えたルイージは、彼を団長ロマーノのキャラバンに案内してくれた。

馬の曲芸師がでて来た。こいつが団長だったんだ。彼はマッテオを見ると髭をしごきながら興味深そうに訊いた。

「私に何か用かね？」

「ぼ、僕、マッテオ・トーニといいます。体操をやっていて、イタリア選手権にもでた事があります。そ、その、ここの入団テストを受けたいんですが！」

ロマーノは、じっとマッテオを見つめた。服の上からでもわかる筋肉質の均整のとれた体型を上から下まで堪能した。それから再び髭をしごきながら、笑顔をみせると言った。

「明日、十時に撤収と移動が始まる。その前に、君のテストをしよう。朝の八時に舞台となったテントに来れるかね？」

マッテオは、大きく頷いた。ボストンバックをしっかりと抱きしめた。このジャージを着てテストを受けよう。待ってろ、ステラ。数日後には、僕は君の同僚になっているからな。

夜のサーカスと西日色のロウソク

「まあ、きれいなロウソクね。西に沈む夕陽を思い出すわ」
ジュリアの声に、はっとしてロマーノは目の前に燃えるロウソクに目をやった。エミーリオがプリモ・ピアットの皿を運んでくるまでの間、つぎの興行の事を考えて意識が飛んでいたのだ。テーブルの上には、二日前にマルコに渡しておいたオレンジと黄色のグラデーションのかかったロウソクが静かに燃えていた。
「ああ、これか。近くで見つけたので買ったのだよ。あなたとの二人っきりの時間には、できるだけロマンティックにしたいからね、私の小鳥さん」
ロマーノがささやくと、ジュリアはにっこりと笑った。
「あなたはいつも私の事をとても大切にしてくれるのね。嬉しいわ」
繰り返される、お互いに心にもない甘い会話。これは必要な結婚だった。いまだに熱烈なファンを持つジュリアを連れてパーティに行く事で、ロマーノはたくさんの協賛金を集め、多くのチケットを売る事ができた。ジュリアは、肉体の衰える前に、どうしても身の保証をしてくれる存在が必要だった。
そう、私たちは人格者ではない。だが、さほど悪い事をしているわけでもない。税金も少しは払い、団員たちの面倒を見て、社会にも貢献している。キリスト教精神にのっとって。私の人生最大の失敗も、このキリスト教精神から起こしてしまったのだったな。

あれはミラノ興行のための設営の夜だった。ロマーノはくるんとした髭をしごきながら十一年前の初夏の夜の事を考えていた。

とても暑い夜だった。まだ六月だというのに湿めっぽく、どこからか湧いた蚊が耳元でうるさかった。こういう宵にはブルーノを相手にするとことさら憂鬱な顔を見せて、ことの後で妙な罪悪感に悩まされるので、むしろ外で商売男でも探すかと、彼はテント場を出て外を歩いた。

そこは、ミラノ中央駅から数駅は離れた小さな鉄道駅の側で、華やかで物価の高い中心地とは全く趣の違う、寂れてわびしい地区だった。そう、華やかなものと言ったら、チルクス・ノッテの色とりどりの電球ばかり。テントから離れれば、薄暗い道に所々悲しげなオレンジ色の街灯がようやく足元を照らした。ネオン灯の青白いバルには地元の男たちがたむろしている。もう少し明るそうな駅の方を目指せば、ほんのわずかに黄色い光を宿す窓がまばらに見え出した。

食事はもう済ませたからな。ダリオのコース料理は、今日も素晴らしかった。ロマーノはそうつぶやいて、リストランテの前を通り過ぎ、小さな駅舎の裏手へと歩いていった。男娼はこういうところで待っていることが多いというのが、長年の経験から育てた勘だった。

だが、それらしい男はどこにもいなかった。いるのは、なんだ、浮浪者のガキか。彼は子供とも若者ともつかぬ華奢な体の影が、壁にもたれかかってぐったりと座っているのを軽く無視して去ろうとした。けれど、暗闇の中で見たその姿がどこか普通でないと感じて、もう少しよく観るために踵を返して近寄った。

それは少年だった。ロマーノが近づくと瞳をあげて、黙ってその顔を見た。何も言わず、怖れた様子も、媚びた様相もなかった。ただ、まっすぐにロマーノが何をしにきたのかを訝るように見上げていた。ロマーノは奇妙に思った事が何だったか理解した。少年の服が濡れていたのだ。汗で湿ったというのではなく、一度完全にびしょぬれになったものが、時間とともにわずかに蒸発した、そのようなひどい濡れ方だった。

「しばらく雨は降っていなかったはずだが」

我ながら奇妙な挨拶だと思いながら、ロマーノは最初の言葉を口にした。少年は何も答えずに目を落とした。興味を失ったかのように。少し身をよじると、ぎゅるるという小さな音がした。少し苦しそうに息をつくと、少年はうつむいて膝を抱えた。腹の音はまた続き、ロマーノは三年前に拾ったブルーノの事を思い出した。

「来なさい。すぐそこにリストランテがある。何かの縁だ、食事をおごってやろう」

そういって少年に手を差し出した。少年は訝しそうに見上げたが、その時再び腹が鳴り、ため息をついて彼はゆっくりとロマーノの手を借りずに立ち上がった。そして小さな声で言った。

「ありがとうございます」

外国人だ。少年のイタリア語を聴いてロマーノは直感した。

小さなリストランテにはテーブルが五つほどしかなかった。焼けこげのできた赤いギンガムチェックのテーブルクロスの上には、オレンジから黄色へとグラデーションがかかった大きなロウソクが焔をくゆらせていた。目の前に座った少年の顔を、そのロウソクの光でロマーノははじめてはっきりと見た。暗い茶色の髪と瞳。意志の強そうな眉に整った鼻梁、これはこれは、なかなかの上玉だ。ロマーノは知

らず知らずのうちに笑顔になっていた。
　自分のためにはワインとチーズを、そして少年のためには、ミネラルウォーターにスープとサラダ、そしてパスタを注文した。スープとパンが少年の前に置かれた時、彼は目の前のびしょぬれの固まりが、どれほど長く食事を望んでいたのかを理解した。目がわずかに潤んでいた。けれど、初めて会った時にブルーノがそうしたように、ものも言わずにかぶりつくような事はしなかった。半ば震えるようにナフキンを膝の上に置き、わずかに頭を下げてロマーノに礼を言ってから、震える手でスプーンを手にした。
　そのスプーンがスープをすくうのを片目で見ながら、ロマーノは単なる世間話のつもりで言った。
「ところで、どうしてそんな格好をして飢えているのか、訳を話してくれるかね？　お前はどこから来たんだ？」
この少年は、ただの浮浪者などではない。こんなにきちんとした行儀を仕込まれた子供が、何故こんなところで飢え死にしかけているのか。
　カチャンと音がした。ロマーノが目をやると、少年はスプーンをスープ皿に立てかけて手を膝の上に戻してうつむいた。そして、それほどまでに待っていた食事をしようとしなかった。
「おい、どうしたんだ。食べていいんだぞ」
ロマーノは言った。
　少年の肩は震えていた。少し訛りのある妙にきちんとしたイタリア語がその口から漏れた。
「訳をいわなくてはいけないなら、食べるわけにはいきません」
「馬鹿な事を。そんな事を言っていたら、次に誰かが酔狂を起こす前に死んじまうぞ」
「覚悟していました。このまま、死んでもしかたありません」
　ロマーノは震えた。ありえない事だった。拾ったときのブルーノとさほど変わらない年齢に見えるのに、勝手が全く違った。考えている事が手に取るようにわかった褐色の少年と違って、この年若い男は、ロマーノには全く理解できない精神構造をもっていた。完全な大人のような恐ろしい意志を体の中に秘めているのだった。いやなら適当な嘘でも言えばいいのに、食事を与えてくれたロマーノに対して欺瞞や裏切りをしようとしない、馬鹿正直でまっすぐなところも持っていた。そこが得体が知れなくて薄氣味悪かった。
「いや、そういうのは、やめてくれ。別にどうしても訊きたいってわけじゃないんだ。とにかく食えよ」
ロマーノがそう言っても、少年は潤んだ瞳をあげたまま、動かなかった。そこで仕方なく、ロマーノは続けた。
「いいか。これは純粋なキリスト教精神だ。うちは生粋のカトリックだからな。お前にはいかなる説明も、見返りももとめない。なんなら神に誓うよ。お前には、生涯、言いたくない事は言わせないし、何かの代償をもとめることは絶対にしない。父なる神と子なるキリスト、精霊の御名によって、アーメン。ほら。これで安心しただろう、食え」
　そこまで言ってしまってから、ロマーノははっとした。しまった。なんて事を誓ってしまったんだ。この子があと五年も育ったらどんないい男になることか。こんなチャンスはめったにないのに！

少年はもう一度頭を下げると、ゆっくりとスプーンを持ってスープを口に運んだ。ロマーノはパンの籠を少年の近くに押してやった。再び頭を下げると、上品な手つきでそのパンを取るとちぎって口に運んだ。それからほうっと息をついた。

ロマーノはミネラルウォーターをグラスに注いでやりながら、少年に話しかけた。

「お前、今夜泊るところもないんだろう」

少年は素直に頷いた。

「こうなったら乗りかかった船だ。私のところに来て寝泊まりするといい。私はロマーノ・ペトルッチ。『チルクス・ノッテ』の団長だ。約束したから、代わりに何をしろとは言わないが、手伝いたければ手伝えばいいし、出て行きたい時には自由に出て行ってもいい。どうだ」

「いいんですか」

「神に誓うってのはそういうことだからな。言葉は守るさ。サーカスってのはだな。世の中からはみ出したような連中ばかりだ。必要なのは、自分のやるべき事をやること、それだけでいいんだ。完璧なイタリア語が話せなくても、社会のありがたがるような紙っ切れがなくても誰も氣にしない。お前みたいな訳あり小僧には悪くないところだと思うぞ」

少年は、スパゲティを食べ終えると、ナフキンで丁寧に口元を拭い、それから静かに答えた。

「僕にでもすぐにできる裏方作業などがあるでしょうか」

ロマーノは少し考えて言った。

「そうだな。例えば、興行後には毎晩舞台のナットが弛んでないか確認する作業がある。それくらいなら、お前でもできるだろう」

「はい。やらせてください」

ロマーノは笑った。

「よし。ところで、お前はなんていうんだ。あ、本名でなくてもいいんだぞ。なんと呼べばいいのか、それと年齢がいくつかぐらいは言えるだろう？」

「十五歳です。名前は……。」

少年は瞑想するような顔つきでしばらく口ごもった。それから、ロマーノを見てはっきりと答えた。

「ヨナタンと呼んでください」

夜のサーカスと鬱金色の夕暮れ

日はずいぶんと長くなってきた。夜の興行がない日は、皆が町にでかけることができるように六時に夕食だった。そして、食べ終わった面々が次々と出て行ったあとも、まだ完全には暗くなっていなかった。

片付け当番にあたっていたマッダレーナは、立ち上がって、ヨナタンの席を見た。「舞台の下のナットのいくつかに問題があるので、先に食べていてほしい」と言われて、他のメンバーは待たなかったのだ。しかし、ヨナタンが食べ終わっていないのに、テーブルクロスまで片付けるのはためらわれたので、彼女は他のすべてのテーブルを片付けてから様子を見るために共同キャラバンの入り口に立った。

灰色と白の雲が交互に空を覆い、そこにあたる夕陽が暖かい色彩の複雑な綾織りを拡げていた。マッダレーナはケニアで過ごした少女時代を思い出してため息をついた。

「すまない」

小走りの足音に意識を元に戻すと、ヨナタンが戸口に向かっていた。

「ああ、手こずったみたいね」

そう訊くと、彼はわずかに肩をすくめた。

「相当すり減っていたみたいで、締まらなくなったのが二つあったんだ。予備がなくて、町に買いに行ったので遅くなった」

マッダレーナは、ワインを彼と自分のグラスに注ぎながら言った。

「でも、どうして、いつまでもあなただけが点検作業をやっているわけ？最初の頃はともかく、今は道化師としてもジャグラーとしてもちゃんと働いているんだし、点検はこの片付け当番同様、みんなで持ち回りにするように団長に掛け合えばいいのに」

ヨナタンは首を振った。

「別に、掛け合うほどのことじゃないよ」

こうヨナタンが断言すると、あとは何を言っても会話が続かないことを知っていたので、マッダレーナはそれ以上言わなかった。実際にはマッダレーナも、この仕事をやれと言われても、きちんとできるとは思えない。舞台の点検は、仲間の命に関わる重大事だ。ちゃらんぽらんなマルコや、入ったばかりだけれど態度がでかく面倒なことを嫌がるマッテオが適当にやるよりは、十年以上にわたり黙々と点検を続けているヨナタンに任せておくのが安心なのは間違いなかった。

マッダレーナは、立ったままワインを口に運ぶ。食事をしながらヨナタンは言った。

「みんなは町に行ったんだろう。君も行っていいよ。終わったらちゃんと片付けておくから」

「ああ、言い忘れていたけれど、町役場からの伝達があったの。野犬に襲われる被害が続いているので、夜に一人で外出するなって。つまり今からは出かけられないの。どうせだから、このままつき合うわよ」

そういうと、マッダレーナはヨナタンの後ろの壁ぎわにおいてある古い木製のラジオのつまみを回してスイッチを入れた。

騒がしいロックに眉をひそめてチューニングをしたが、次に聞こえてきた曲で手を止めた。

「あ」

それは子供の頃に繰り返し聞かされたメロディだった。マッダレーナは、曲をそのままにして、椅子に座ってワイングラスを口に運んだ。

ヨナタンは静かに食事を済ませると、やはりワイングラスを傾けながら、クラリネットと弦楽器の静かな対話に身を置いていた。マッダレーナは、そのヨナタンの様子を見て、小さく微笑むと、ためらいがちに口を開いた。

「誰の曲だか知っている？」

ヨナタンは小さく頷いた。

「モーツァルトの『クラリネット協奏曲』だよ。これは二楽章だ」

「そう。父はいつも『愛と追憶の日々』の曲って言っていたわ」

「映画で使われたんだろう」

「そう。父がアフリカ狂いになる手助けをした映画よ。すっかりかぶれちゃって、こればかり聴いていたの。今日みたいに夕陽のたまらなく綺麗な日にはお約束みたいなものだったのよね」

少年だったヨナタンの周りには、アフリカ狂はいなかった。彼がこの曲を知っているのは、映画の挿入曲としてではなくて、純粋にモーツァルトの協奏曲としてだったが、やはり思い出に郷愁を誘われていた。

彼の思い出が連れて行った先は大きくて明るい広間だった。多くの人びとが着飾り、手にはさまざまな形のグラスを持ちざわめいていた。広間の奥には室内楽の楽団が陣取り、『クラリネット協奏曲』を奏でていた。残念ながら多くの客たちは、会話に夢中で音楽を聴いていなかった。少年だった彼は、その曲をゆっくりと聴きたかった。大切な人と何度か一緒に聴いた思い出の曲だったから。けれど、けばけばしく着飾った客がグラスや皿をがちゃがちゃ言わせてひきりなしに語りかけてくるので、彼は曲を静かに聴くことができなかった。

ヨナタンは、ワインを傾けながら、ラジオから流れてくるクラリネットの響きにしばらく耳を傾けていた。暖かい夕陽が最後の光を投げかけてから、テント村に別れを告げた。後ろにいるマッダレーナのわずかな氣配は彼の郷愁を邪魔しなかった。

マッダレーナは、何も言わないヨナタンの様子に、過去のことを訊いてみたい衝動に駆られたが、これまでも絶対に口を割らなかったので、無駄だろうなと思った。けれど、いつもよりもリラックスしている様子の彼のことを少し身近に感じた。ワインや夕陽にメランコリーな心地になったせいもあったかもしれない。ヨナタンのすぐ後ろに椅子を近づけて座ると、低い声で語り出した。

「あたしね、ライオンたちがいつも閉じ込められているのが可哀想だったの。今日みたいな夕陽の綺麗な時にはね、父さんに知られないように、ライオン舎に行ってジャスィリを連れ出してね。一緒に丘の上のガーデニアの樹のあるところまで駆けっこしたのよ。父さんは、蓄音機でこの曲をかけていて、その音が途中まで聞こえていた」

「ライオンと。綱が付いているわけじゃないんだろう？　逃げだしたりしなかったんだ」

マッダレーナは笑った。

「しないわ。だって、ジャスィリは、うちで生まれたんですもの」

共同キャラバンから漏れてくる光と、クラリネットの音色、そして二人の和やかな会話。ほんの少し離れたところに立っている少女の影は項垂れていた。ステラもみんなに誘われて町に行こうとしていた。でも、ヨナタンを待っていたのだ。もう点検が終わったか、大テントに確認に行ったら暗くなっていたので、共同キャラバンに探しにきたのだ。

ステラはこの曲を知らなかった。二人が浸っている思い出の世界に入っていくことができなかった。二人の会話のウィットや大人の機智、静かな目配せや微笑についていくことができなかった。自分だけが子供で、二人は大人に思えた。

ステラは、項垂れたまま踵を返すと、自分のキャラバンに向けて歩いていった。マッテオたちと一緒に町に行っていればよかった。そしたら、こんな光景は見ずに済んだのに。目の前がにじんできた。私、いったい、何をしているんだろう。何を泣いているんだろう。ヨナタンは何も悪いことをしていない。ただ、私が勝手に好きになって、勝手に期待して……。

その時、ガルルルというなり声が聞こえた。ステラは、涙を拭いて振り向いた。暗闇の中、四対、いやもっと、目の光が浮かんでいる。野犬……。町役場から言われていた……。一人で外にいるなって言われていたのを忘れていた。ステラはそっと、後ずさりながら、共同キャラバンの方へと戻ろうとした。あそこには、ヨナタンとマッダレーナがいるから……。

「助けて…」

小さな叫び声だったが、共同キャラバンの扉が開いていたので、ヨナタンとマッダレーナはすぐに氣がついた。マッダレーナはすぐに立ち上がって、ラジオを消した。走るステラの叫びと、獣のうなり声が聞こえて、ヨナタンはすぐに走り出した。

「ステラ！」

ヨナタンはステラの側に駆け寄ると、少女と獣たちとの間に立ち、小石を拾って投げた。獣たちはそれに怯んで、動きを止め、一度下がった。だが、すぐに体制を整えて、再び近づいてくる。月明かりの中、獣たちの姿が浮かび上がる。野犬なんかじゃない、野生の、狼だ……。ヨナタンは心の中で呻いた。だめだ、石なんかでは追い払えない。怯えるステラをかばいながら、彼は飛びかかられるのを覚悟した。

その時、突然、恐ろしい咆哮がとどろき、二人と狼たちとの間に何かが飛び込んできた。巨大な獣の登場に狼たちは仰天した。それはヴァロローゾだった。マッダレーナはすぐにライオン舎に行って、頼りになる雄ライオンを連れてきたのだ。狼たちはライオンに脅されるなどという経験はしたことがなかったので、慌てて尻尾を後ろ足の間に隠して逃げ出した。

ステラは体の力が入らなくなり、その場に座り込むとガタガタと震えて泣き出した。ヨナタンは、そっと彼女を抱きしめると背中をさすって言った。

「大丈夫だ。もういなくなったから」
それは、温かい手だった。静かな声でそう言われると、本当にもう二度と恐ろしいことはおこらないように思われた。
ヨナタンが来てくれて、守ってくれたことが嬉しかった。この人はやっぱり私の王子様。わたし「だけ」の王子様でなくてもかまわない。願いが叶わなくてもしかたない。ただの子供と思われていてもいいから、やっぱり側にいたい。ステラは気持ちの抑えがきかないまま子供のように泣きじゃくった。

ステラが落ち着くのを辛抱強く待ちながら、ヨナタンはマッダレーナに礼を言った。マッダレーナは首を振って言った。
「私は何もしていないわ。ヴァロローゾが追っ払ってくれただけ」
それからヨナタンにウィンクすると、共同キャラバンに鍵をかけて、雄ライオンと一緒にライオン舎に向かってゆっくりと歩いていった。

夜のサーカスと極彩色の庭

レモン色のボールがくるくると宙を舞う。軽やかに弾んで、高く、低く、生きもののように整然と綺麗な放物線を描く。右の掌から飛び立って、行儀良く左の掌に戻ってくる。一つ、二つ、三つ、あまりに速いので、その数はなかなかわからないが、現在飛び立っているボールは六つだ。この辺までは熟練したジャグラーには余裕がある。ヨナタンの動きはおどけて滑稽だが、目は笑っていない。
丁寧に一つひとつの動きを鍛錬する。本番でヨナタンが失敗することは至極稀だった。彼は覚えたての八ボール投げを興行で使用することはしない。練習で百回試して、すべて成功するレベルにならないと、誰に何を言われても興行には使わない。団長ロマーノやその妻のジュリアは、そのことに文句を言わない。彼が、どれだけの時間を割いて鍛錬を続けているかよく知っているからだ。
チルクス・ノッテの出演者たちは、ジュリアのプランによって鍛錬をしていたが、基本的には本人の意思が最も尊重された。たとえば、早朝に大テントの舞台でステラがバレエのレッスンを自主的にはじめた時にも、すぐに許可がおりた。空中ブランコ、大車輪、馬の上での倒立、ライオン芸、空中綱渡りのレッスンは一人で行うことは許されない。事故が起った時に即座に応急処置ができるよう、かならず誰かが監視しなくてはならないからだ。マッテオにはエミーリオ、ルイージにはマルコが、ステラのレッスンには主にヨナタンがついた。

そういうわけで、ステラが早朝バレエのレッスンをする時には、同じテントの端の方でヨナタンがジャグリングの鍛錬をし、それから引き続き二人でブランコの訓練をするというのがここ数ヶ月のパターンになっていた。ステラはヨナタンと二人で過ごす朝のひと時を大切に思っていた。もっとも、ここしばらくはブランコの時間には、ようやく起きだしてきたマッテオがバレエレッスンを同じテントではじめるので、完全に二人きりというわけではなかったのだが。

「今日の午後、何か予定はある？」
ステラはブランコから降りてくるとヨナタンに訊いた。この日は昼の興行がないので自由時間になったのだ。ヨナタンは首を振った。
「特に何もないけれど、どうして？」
ステラはヨナタンからタオルを受け取って、汗を拭くと小さな声で言った。
「あのね。肉屋に行きたいの。でも、一人で外出しちゃダメだって……」
先日のチルクス・ノッテでの野犬騒ぎ、目撃譚によってそれが狼であったことが伝わると、町は大騒ぎになり、昼でも一人での外出は避けるようにとの通達が来たのだった。襲われかけた当のステラとしては、一人で外出するのが怖いのは当然だった。しかも、肉屋に行くというのでは。
「一緒に行こう。でも、なぜ、肉屋なんだ？」
ヨナタンが訊くと、ステラは少し顔を赤らめて答えた。
「ヴァロローゾにお礼をしたくて」
ヨナタンは笑って頷いた。狼に囲まれて絶体絶命のピンチに陥ったステラとヨナタンは、襲われる覚悟をした。あの時、マッダレーナが連れてきてくれた雄ライオン、ヴァロローゾが狼たちを追い返してくれなかったら、二人はこうして無事ではいられなかっただろう。

「なんだよ、それ」
マッテオが怪訝な顔で近づいてくる。この若い青年は、ステラとヨナタンが親しくするのを快く思っていないのだ。ましてや二人だけの秘密があるなんて聞き捨てならない。
「この間の、野犬騒ぎの件なの。マッテオには関係ないでしょ」
「ふ～ん。僕も、この後、町に行こうと思っていたんだ。ヨナタンに用事がないなら無理していかなくても、僕がステラと……」
それを聞くとステラはものすごい形相でマッテオを睨みつけた。余計なことを言わないで！　ヨナタンは肩をすくめて言った。
「用事はあるよ。注文したナットを取りにいかなくちゃいけないんだ」
ステラは大急ぎで言った。
「ほらね。私たち、この後すぐに行くから、マッテオはブランコレッスンの後で、エミーリオといきなさいよ。団長の用事で町に行くって言っていたもの」
それから、ぽかんとするマッテオをそのままにして、肩をすくめるヨナタンの腕を取って大テントを出て行った。

それは大きな肉のかたまりだった。もちろんステーキ用肉などではないので、キログラムあたりは廉価なのだが、ライオンへのプレゼントに一キログラムというわけにはいかない。

「ヴァロローゾ、喜んでくれるかしら」
ステラが心配そうに言うと、ヨナタンは笑ってその重い紙袋を持った。
「間違いなく喜ぶよ。他のライオンたちが妬まないといいけれど」
キャラバン村へと戻る道すがら、ステラは紙袋が重すぎるのではないかと、心配そうにヨナタンを見た。
「心配いらないよ。そんなには重くないから」
「でも、あのね。もし、重すぎなかったら、二分ほど遠回りなんだけれど、こっちの道を行ってもいい？」
そう言って、左側の道を示した。ヨナタンは微笑んで頷くと、通ったことのない道へと向かった。
「こっちに何があるんだい？」
「あのね。とっても素敵なお庭のお屋敷があるの。この前通った時、花がいっぱいで、ヨナタンにも見せたいなって思ったの」
そうして、ステラは長い塀のしばらく先にある華奢な鉄細工の門の前にヨナタンを連れて行った。
「ほら」

それは、大きなヴィラだった。春から初夏の花がこれでもかと咲き乱れている庭が広がっていた。薔薇、飛燕草、ダリア、百日草、ナスタチウム、牡丹、かすみ草……。アーチに、華奢な東屋に、木陰にこれでもかと咲いた花が寄り添い、風に揺られて薫りを運んできた。ステラはこの庭が大好きだった。こんなに美しい庭は見たことがないと思った。
ヨナタンも好きでしょう？　そう言おうとして、彼の方を振り向いた時、青年の顔に浮かんでいる表情にドキッとして、押し黙った。
彼は、眉をひそめて、むしろ泣きそうな表情でその庭を見ていた。どこか苦しげで悲しそうですらあった。
その瞳が見ていたのは、イタリアの郊外の町にあるヴィラの庭ではなかった。現在、咲き乱れている花でもなかった。

「ねえねえ、パリアッチオ、この花。一緒に球根を植えたやつだよね」
金色の髪の少年が満面の笑顔で言う。ぷっくりとした小さな手がもう一人の少年の掌をそっと包む。嬉しくて嬉しくて仕方ない、幸せな少年。遅咲きのチューリップの、艶のある赤と黄色の花びらを愛おしそうに撫でる。その中には秘密のようにおしべとめしべが見えている。二人でその花を覗き込んで微笑みあう。
「あ、そうだ。ママに花束を作ろう」
「そうだね、ピッチーノ。花の女神様になるくらいたくさんの花を贈ろう」
二人で摘んでも摘んでも、その庭の花は尽きることがなかった。白、ピンク、黄色、赤、薄紅、橙、紫、青……。花の薫りにむせ返るようだった。青空には翳りがなく、陽射しが強かった。遠く薔薇のアーチから、すらりとした影がこちらに向かってくる。
「まあ、二人ともここにいたのね」
鳶色の艶やかに輝く髪が、肩に流れている。金色の輝く瞳が微笑んでいる。あたりは薔薇の香水の薫りに包まれる。
「ママ！　ほら、これ！」
「僕たち、花束を……」

「まあ、二人とも、本当にありがとう」

背の高い方の暗い鳶色の髪の少年は、金髪の少年が女性に駆け寄ってその首に抱きついたのを眩しそうに眺める。一幅の絵のような光景。完璧な美。

「まあ、ピッチーノ。あなたは本当に赤ちゃんね」

それから、彼女はたくさんの花を抱えて立っている少年の方にも顔を寄せて、その頬に優しくキスをした。

何かを口にしようとした時に、向こうから駆けてきた年配の女性が、それを遮った。

「まあ、皆さん、こんな所に。若様、イタリア語の先生が書斎でお待ちですわ」

彼は、その女性、マグダ夫人が持ってきたニュースに失望の色を見せた。

「でも、まだ時間は……」

「そうですが、先生をお待たせはできませんわ。奥様、そうでしょう？」

「パリアッチオ。マグダ夫人の言う通りだわ。さあ、お行きなさい」

そう言って、彼女はもう一度、濃い鳶色の髪の少年の頬に優しくキスをした。マグダ夫人と一緒に城の方へと向かいながら、少年はもう一度花園の方を振り返った。二人が笑いながら花を摘んでいた。青い空。眩しい陽射し。楽しげな歓声。

「さあ、若様。イタリア語の授業が終わりましたら、お母様と、それから小さい若様とお茶を召し上がれますよ」

「ヨナタン？」

その声で、彼は我に返った。

「大丈夫、ヨナタン？」

ああ、そうだった。僕はヨナタンで、ここはイタリアの……。肉の入った紙袋の重み。それからステラの心配そうな顔。金色の瞳。

「私、悪いことしてしまった？　このお庭、嫌だった？」

ヨナタンはステラの方に向き直ると、優しく笑って首を振った。

「そんなことはないよ。本当に綺麗な花園だ。連れてきてくれてありがとう」

そう言うと、ステラの前髪を、その柔らかい金髪をそっと梳いた。鳥のさえずりが小さい少年の笑い声のように聞こえた。